

開発の二つの記憶

内山田 康

1. はじめに

ゲオルゲ・グロッセが描いた大戦間のベルリンは、第一次世界大戦の未曾有な暴力の記憶とその後に訪れる国民社会主義による未曾有の破壊の予兆に満ちている。その寓喩的絵画はリアリズムの限界を超えて不安と暴力に満ちた共和国の現実を生々しく（退廃的ブルジョア文化に対する嫌悪と深いところに潜む魅了の両方を）表現している。画家が現実をリアルに描くことを可能するはずの現実からの自律性は無い。芸術は社会全体を覆っているムード、あるいはブルデューが問題化している「性向」(disposition)から独立していないだけでなく、その中にある型あるいは「図式」(schema)を土台として生み出され、再びそのムードと性向を作り出している¹⁾。グロッセは共産党員であった。しかし彼は労働者の立場からブルジョア批判をしたのではなく、自らが嫌悪し同時に魅惑されたブルジョアの性向性の中からブルジョア風刺をしている (WHITEFORD 1997: 12)。ポール・ウッドはグロッセら神即物主義者たち（グロッセ以外にはオットー・ディックスなど）が描いた寓喩的絵画は偏向的な (tendentious) ものであるという (WOOD 1993: 283-297)。作品が偏向的でありフィールドの性向から自律していないことは大戦間に書かれたハイデガーの著作にも当てはまる。彼の著作は当時のナショナルな大衆文化と同じ図式を使いながらも、崇高な哲学の言葉と語源学の方法で読者を古代ギリシアの「起源」へと導きその身近な起源を隠している (BOURDIEU 1991)。作品がフィールドの諸性向から自律していないことは人類学にも該当する。人類学はそれが置かれているフィールドの諸性向から独立していないだけでなく、そこから生まれ、その部分を再び形成している。人類学は開発の記憶をどのような性向を持ったフィールドの中で、どのような図式を使ってその対象を描くことができるのだろうか²⁾。

ブルデューは官僚的フィールドの性向を考察して次のように言う。「国家について思考しようと試みることは国家の思考を引き継いでしまう（あるいは乗っ取られる）、すなわち国家が産出して保障している思考の範疇を国家に対して適用することによって国家の最も深遠な真実を誤認してしまう、という危険を冒すことである」 (BOURDIEU 1994: 1)。近代国家が体现しているはずの合理的思考の枠組みが（国家の最も深遠な真実を誤認させる限りにおいて）国家理解を妨げるとしたら、それ以外に人類学はどのような方法を持っているのだろうか。フーコーは国民社会主義の合理性が狂気ではなかったこと、更にこの合理性が実はわれわれが良く知っている制度の合理性であることに言及して次のように自問自答する。「このような明白な事実に対してどうしたらよいか？ 理性を裁くか？ 私はこれほど不毛なことはないと思う」 (FOUCAULT 1982: 210)。この（両義的な）合理性を持った国家の主導による開発を考察するにあたって、人類学はこの同じ合理性の外部に思考の足場を持つことができるのか。もし外部がないとしたらどのような民族誌の戦略が可能なのか。

ネットワーク化した国際開発を研究対象として民族誌を書いたアンネリーズ・ライルスは、フィールドにおいてグローバルな開発の図式に出会い続けた。1995年に開催された北京女性会議のNGOフォーラムに参加する準備を進めていたNGOのフィールドは女性問題解決の同じ言葉で満たされていた。その言葉を生み出していたのは繰り返すフォーラムだった。同じフォーラムがニューズレター、フォーラム、レポート、ガイドライン、ワークショップで繰り返し現われNGOの活動を生み出していた。開発

の外部にも内部にも同じ図式があった。グローバルなネットワークとしての国際開発を研究する時、開発の記述を可能にする外部は無いとライルスはいう (RILES 2000)。フォームに着目したライルスの方法は極めて人類学的である。アルフレッド・ジェルが芸術の人類学で手本を見せてくれたように(権力や合理性ではなくフォームに着目して)「図式の転写」を辿ることによって開発の弾力的な保守性と増殖性の秘密を理解することが可能となるかもしれない³⁾。私は本稿で「開発の記憶について人類学的な民族誌を書くことはいかにして可能か？」を根本問題としながら、その問題には直接答えず、開発学者、サバルタン、私個人の開発の記憶を多面体の方法や以下で述べるオネイリックな描写をモデルとしながら開発のプロセスの記述を試みた⁴⁾。すなわち論理の直線的な展開という形式を採らず、あるところでは具体的な開発体制の支配的言説を辿り、あるところではサバルタンの対抗的言説を辿り、あるところでは「批判的自伝」のナラティブに映し出された開発官僚プロセスを辿り、あるところでは(修辭学的な始まりと終わりを持った)ナラティブにはならないカフカの小説の方法で開発官僚の舞台装置を辿り、という風にあちこちに飛びながら、開発の記憶を生み出す複数のプロセスをごく部分的にはあるがグロツに習って偏向的に模倣して描き出すことを試みた。その理由は開発が以下で述べるように演繹法でもなく帰納法でもなくアブダクションを使うからである。一つの逸話を示そう。その目的は官僚的フィールドにありふれた日常的な言葉と感情を使ってブルデューの「国家について思考しようと試みることは国家の思考を引き継いでしまう…」という問題提起に対してグロツのように偏向的にしかしより広い社会的相互関係を視野に入れて記述することの有効性について反省することである。

ある大使がある時「草の根無償」プロジェクトの評価の件で怒り、たまたま隣にいた私に次のような意味のことを言った。「コンサルタントに草の根無償の評価を頼んだらTORを無視して頼んでいないことまで評価して問題があるという評価をした。けしからん。何をどこまでどう評価するとちゃんとTORに書いてあった。その通りにやっていたら良い評価になったはずだ。あいつは評価が何か全く分かっていない。そうだろう？」このTORは官僚的フィールドの中で繰り返し出てくる支配的図式の部分でもある。ここで開発の経験の主体でもあり語り手でもある私自身について述べなくてはならない。私は1984年から1987年にかけてモザンビークとエチオピアの開発の現場で国際機関とNGOのフィールドの中で働いた。1987年から1995年までイギリスの二つの大学院で開発研究を学び一つの大学院で社会人類学を学んだ。1995年から2000年にかけて日本に戻りある政府系開発研究機関に研究員として勤務した。2000年に再びイギリスに戻り大学で2年間社会人類学の教師をした後、2002年に日本に戻り大学で人類学の教師をしている。

本稿が問題にするのは以下の二点である。第一は、開発のフィールドには主要な図式があり、この図式は転写されるという問題である。第二の問題は、この図式が転写されるプロセスを何処から(例えば内部あるいは外部)いかに(例えば客観主義的に、批判的自伝の方法で、オネイリックに)記述するかである。本稿の「はじめに」と「おわりにかえて」の間は二部構成になっている。第一部では人類学の擬似自律性を想定してそこから「ケーララ」がどの様にして開発モデルとして記憶されているかについて開発体制内で働く開発学者たちによる支配的言説とサバルタンたちの対抗的言説を対比させながら議論する。ここでは以下で述べるようにフォームそのものとナラティブの内容が問題とされるが、これを問題化している人類学者の立場は明らかにされない。第二部は開発の外から中に入り、人類学的「外部」が不可能となった現地人の立場からフィールドの性向を共有した偏向的な(あるいは模倣的な)開発の*modus operandi* (作る方法)についてのオネイリックなモード(これについては以

下に述べる) を使った始まりも終わりも無い開発実践のプロセスを記述する。私はグロッセやカフカに習って外部としての歴史の過去にも終末にも眼差しを向けず、「外部」としての人類学を想定せず、社会のフィールドの性向の一部となっているフィールドから開発の記憶についての傾向的な記述を試みた。ここではナラティヴの内容ではなくフォームが問題とされる⁵⁾。第二部で述べる開発官僚システムにおける政治的合理性と過剰な政治権力の*modus operandi*をこのプロセスに関わる多くの人たちは常識として知っている。しかしこのプロセスについて書かれたことは殆ど無い。その理由のひとつは、開発官僚システム内部で働く職員は、その内部事情について書かないと制約させられている事実である⁶⁾。方法論的により重要な問題は、この誰もが知っている合理性と政治権力の関係をどう記述するかである。私は合理性を使って開発官僚システムの(非)合理性を記述するのではなく、開発官僚システムが開発という*opus operatum* (完成した作品) を作る上で官僚的フィールドに固有な図式を転写する第二の自然となった方法を「不必要な部分」まで模倣することを通じて*modus operandi*が起こるフィールド内のいくつかの関係の記述を試みた。

本稿の削除された副題「開発の美しい記憶に抗して」について述べておかなければならない。ベンヤミンは国民社会主義の暴力による死を哀悼することに抵抗した。哀悼して記憶することが暴力的死を美化して祝賀することを避けたかったからである (JAY 1999)。祝賀は忘却と変容を伴うから、終わった出来事としての制度的暴力ではなく、その生起する生々しさを記憶し続けたいと考えたのだろう。私はベンヤミンに習い美しい記憶に抗して本稿を書いた。しかし人類学者はベンヤミンではない。我々が辿る道は*opus operatum*を離れ*modus operandi*へ遡りそこから再び*opus operatum*へ戻ってくる繰り返しでしかない。本稿の記述も人類学のフィールドの中で作業を進めてゆく中で、人類学のフィールドから図式が転写され、オネイリックな草稿により分析的な記述が混入して行き、最終的には*modus operandi*から遠く離れたものになってしまった。

2. 開発の記憶1: ケーララの農地改革

人類学者を含む外部者たちは1960年代にケーララにおけるマルクス主義者たちの台頭とその政治に関心を持った (例えばGOUGH 1965, 1967, 1968, 1970)。ケーララのマルクス主義者たちに対するこの関心は、この時代に西欧の研究者たちがアフリカの社会主義者たちやベトナムの共産主義者たちへ向けた関心と不可分である (例えばGOUGH 1979)。カトリーン・ゴフがそうであったようにこの一群の外部者たちは左翼の知識人であった。1970年代半ば以降、より大きな外部者の集団がケーララの特異な社会統計に注目した。彼らは開発に係わりを持つ学者、官僚、コンサルタントなどである。この特異な社会統計がひとつの開発モデルへと変換された。ロビン・ジェフリーは「ケーララはどうしてモデルとなったか」という副題の著作の中で「外部者がケーララに対して夢中になっている問題」について言及している。外部者を夢中にさせたのはケーララの普通ではない社会統計である。これはケーララが第三世界にありながら出生率と乳児死亡率は低く、平均寿命は70歳近く、大多数の男女が読み書き出来るという不思議である (JEFFREY 1992: 4) ⁷⁾。

2.1 想起される特異な統計

1970年代半ばから1990年代半ばに至るまで、経済発展なしに社会発展を示す社会統計の数値が高いというインデックス上の事実は、開発に携わる行政家、専門家、研究者たちの間で「ケーララの奇跡」としてもはやされた。支配的なケーララ近現代史では「なぜケーララの奇跡は起こったのか?」を

中心的問題として「共産党政権の誕生」及び開発介入する州政府によってもたらされたとされる「ケーララの奇跡」という終着点に向かう進化の歴史(あるいはその前史)が目的論的に記述されている⁸⁾。外部者たちによる近現代史, 政治経済学, 開発人類学, 経済学は「外部者がケーララに対して夢中になっている問題」を共有しているために相互に補完的な調和を作り出している⁹⁾。私自身1984年にモザンビーク(国際機関), 1985-87年にエチオピア(NGO)の開発の現場で働き, その後イギリスで1987-89年に開発研究修士コース, 1989-91年に開発研究博士課程, 1991-95年に社会人類学博士課程で学ぶ間に「ケーララモデル」および「ケーララの奇跡」という用語を, 開発のコンテキストの中では説明抜きで繰り返し耳にした。しかし社会人類学のコンテキストの中ではこの表現は使われていなかった。(この事実は, 開発のフィールドと社会人類学のフィールドの性向が違うことと, 図式とその転写は特定のフィールド内で起こる傾向があることを示している。)

この問題の典型的な見方についてアマルティア・センを例に概観してみよう。センはドレズとの共著の中で, ケーララとウッタラプラデシュの社会指標を比較して次のように断言する。この二つの州は貧困に関しては同じような問題を抱えながら, 人々の幸福度を示す諸指標は両極に位置している。ケーララの成功の原因を追究すると, 公的介入によって様々な社会的機会—とりもなおさず初等教育, (後で述べる) 農地改革, 社会における女性の役割—を促進したこと, そして保健およびその他の公的サービスを広範囲に普及させたことへと辿り着く。ウッタラプラデシュの失敗の原因は, この同じ社会的機会に対する公的介入を怠ったところにある(DRÈZE and SEN 1995: 51-52)。センが数多くの著書の中で同じパターンで繰り返し引用するケーララの特異な統計は, 成功した公的介入のインデックスとして記憶されている¹⁰⁾。

開発介入主義者であるセンは, 近代的統治の視点からケーララを特定の社会指数に翻訳することと, 統治の実践が, この社会指数の背後にあると想像されている国民の生活に対して, このインデックス(すなわち動作主である「火」に起因すると考えられる「煙」)を手がかりに介入すること, そしてこのインデックスを使って公的介入の成功の度合いを評価することに疑問を抱いていない。センは国民の幸福度の高低に公的介入以外の原因がある可能性については関心を持っていないように思われる。問題を三点だけ述べる。第一にケーララの成功に関するセンの言説は, インデックスとそれが指し示す想像上の動作主の間に横たわる不連続をスムーズに連続させている点においてアブダクションを使った物語である。インデックスとアブダクションについて最小限に説明しておこう。インデックスをA(例えば煙), インデックスが指し示す動作主をB(例えば火)とする。(1) もしBであればAである。(2) Aが確認された。(3) Bが原因だ。しかし「煙」というインデックスの動作主が「火」とは限らない。「煙」を起こしているのは「火」以外の動作主である可能性があるだけでなく, 「煙」というインデックス自体が意図を秘めた動作主である可能性がある。この物語性は開発アブダクションに共通する。第二にセンの物語に組み込まれた盲点は, このインデックスの誕生と同時に国民の生活が創出されていることを見落とし, 国民の生活がこのインデックスの背後にあるかのように想像するところがある。第三に, 積極的な公的介入の有無と国民の幸福度の高低を結びつけるセンの単純な推論は多重決定の可能性について考えない。結論を先取りすれば, 成功のレプリカ作りを可能にするためには, ケーララという固有の歴史性を持った重層的な現象およびその多様な経験は, 比較可能で, 翻訳可能で, 事実性を持った普遍的介入モデルへと作り変えられる必要がある。センはレプリカ作りの中に夢中である一方で, どのような条件下でこの特異な変換のプロセスが可能になり, 同時にこの条件が忘却されているかについてそのメカニズムを省みようとしない。以下, 農地改革に限ってこの特異な返還プ

ロセスの概観を試みる。農地改革が取り組んだ土地問題は、土地を巡る様々な次元の問題が公共政策に翻訳される過程で、近代的土地所有制度のグリッドの中で特異な形へと再現出された。議論の道筋を明確にするために単純化すれば、ケーララにおいて場所が空間化して別の形で場所化していった過程を代表する一連の事件が1970年代から1980年代に掛けて行われた農地改革だと言える¹⁾。その過程で何が翻訳されえない過剰として土地の上に残されたのだろうか。それについて議論する前に、ケーララの農地改革についての支配的な言説を概観する。

2. 2 「土地なしが土地持ちになった」

南アジアで最も革新的であったケーララの農地改革のエッセンスは、土地なしの農業労働者たちが住宅を建てるための土地（地方では10分の1エーカー）を獲得して狭いながら初めて土地持ちになったことだと言われている。センの協力者の一人であるV.K.ラーマチャンドランによれば1957年に政権に就いたケーララの共産党政府による農地改革案は、小作人に対する小作権保障、貧困層に対する宅地提供、土地なしに対する余剰地配分という三つの要素から構成されていた。このうち最初の二つについてはある程度の成功を収めたが、土地なしに対する余剰地配分は、地主が農地改革前夜に農地保有の最高限度を避けるために身内で土地を細かく分けて所有したこともあり失敗に終わった（RAMACHANDRAN 1996）。南アジアにおける農地改革の比較研究を行ったロナルド・ヘリングによると、非耕作者から余剰農地を取り上げ、これを耕作者に配分することを主要な目的のひとつとした農地改革を行うに当たって誰が「耕作者」であるかを決定する分類方法が重要な問題であった。農地改革を実際に行った国民会議派政府による農地改革実施の過程で分類上「小作人」と認定された者には裕福なナーヤルやシリア派キリスト教徒たちが数多く含まれていた。またプランテーションおよび寺院が保有する土地は農地改革の対象から除外された。更にケーララ南半分を占めるトラヴァンコールにおける最大の地主は形式上トラヴァンコール藩王国であり、分類上「小作人」と認定された者たちの多くは実質的に土地を所有していて日常的には「地主」（janmi）と呼ばれていた。農地改革で最も利益を得たのは「小作人」の認定を受けた裕福な実質的な地主たちだった。一方、最も利益を得なかったのは土地なしであった（HERRING 1983）。土地なしは余剰農地の配分を得られなかっただけでなく、以下で触れるようにそれまで持っていた農耕地の使用権を失った者たちも多かった。

フランクとチェシンは、農地改革には限界があったことを認めながら、ケーララの農地改革は大多数の人々の暮らしを改善したと結論して次のような修辭を付け加える。「今はもう地代を払う必要も無い。今はもう立ち退きに怯えることも無い。宅地を得た者たちは、立ち退きの恐怖を取り除かれ、真に自分たちの所有物となった土地に、数本の椰子と他の木々を植えたのだった」（FRANKE and CHASIN 1989: 58-59）。彼らはジョアン・メンチャーが1971年に調査したナドゥールを1987年に調査して水田と宅地の所有に関するジニ係数を比較して、それぞれが16年の間に13ポイントと39ポイント下がっていることから、ジニ係数の下落に見られる不平等の改善は農地改革によるものだろうとアブストラクションによる推論をしている。このナラティヴにおいては非人類学的な推論の上に人類学風な修辭が重ねられている。ジェフリーも農地改革が大規模な土地の分配に帰結しなかったことを認めた上で、ケーララの多くの貧しい世帯が小さな土地を初めて所有する経験を通して自立したと主張する。「ジャイヤンマのような貧しい女性にとって、自分の小屋を改修すること、ドアをつけて窓をつけることが初めて可能になり意味のあることになった。もうどんな地主でもこれを取り上げることはできない」（JEFFREY 1992: 172）。このような修辭法は、土地なしにとっても農地改革の成功の「意味」は大きか

ったという印象を最大限に膨らせている。言い換えると、ヘリングの散文的記述にあった農地改革の部分的失敗という欠落を「閉塞」させ、そこに無かったあるものを付け加えるために物語の手法が使われている¹²⁾。この一見して無邪気なおとぎ話は、第一にヘリングの議論と正面から対立していない点において、第二に農地改革の根源的問題である農地分配を迂回しつつ、同時に農地改革の文脈の中で異なる次元の普遍的(あるいは西欧的)人間主義的な「より人間らしくなりたい」という願望を(例えば女性の自立や庭に植えられた椰子の苗木に言及することで)想起させる効果を持っている。

フランクとチェシン、ジェフリー、セン、その他の作家たちによる同様の小さな物語は、相互に引用を繰り返しながら「ケーララの奇跡」と言う大きなおとぎ話を作り上げる。国際開発体制が生産するナラティヴは、これを繰り返し公認化し続けてこの物語に新たな真実性と動作主性を与えている。この大きな物語の中では、ケーララの改革を生み出したのは、識字率が高く、乳児死亡率が低く、新聞を読み、政治意識が高く、労働運動に参加するケーララの人々と、その要求に積極的に応える行動的なケーララ政府という好循環である。この開発の物語が想起させるのは、開発体制の中で働く者にとっては馴染み深い「ソーシャルキャピタル」と「パブリックアクション」の概念である。更に抽象化するとソーシャルキャピタルとパブリックアクションの組み合わせから成る物語の骨格が見えてくる(例えばHELLER 1996)。開発体制が想起する「ケーララ」は「ソーシャルキャピタル」や「パブリックアクション」など開発のフィールドであちこちに転写する主要な図式の組み合わせから作られたリアルで抽象的なモデルである。開発のフィールドにおいて「ケーララ」は不必要な過剰を取り除き、外部者たちにとって消費可能になったレプリカでなければならない。しかしケーララで私が家族と共に住んでいた借家の裏の壁に張り付くようにして小さな小屋を道路沿いに建てて住んでいた不法占拠者たちにとっての農地改革とは、何世代にもわたって住んだ土地から次第に追出されて行った一連の出来事を完成させた事件だった。「農地改革によって土地を失った」という不可触民たちのナラティヴにおいて、農地改革は歴史的に長い過程を圧縮した略号として理解することができる。以下、取り除かれた過剰の回復を試みつつその要点を述べる。

2. 3 「農地改革によって土地を失った」

私が住んでいた家の裏には6つの不法占拠者の小屋があった。1つ目の小屋には不可触民パラヤの未亡人、あとの5つには不可触民のプラヤたちが住んでいた¹³⁾。プラヤの不法占拠者たちは、不法占拠していた道路沿いから東側に200メートルほど行ったところに土地を持っていたという¹⁴⁾。そこは村はずれにある氾濫源との境のじめじめした低い土地だった。彼らの祖先たちは、ナーヤルの地主がこの一帯に持っていた16エーカーの土地で働く「奴隷」(adima)だった。彼らは主人から与えられたこの不毛な土地を耕作可能な土地に改良して住んでいた。彼らは椰子の葉に書かれた土地の証文を持っていたが、ある時、夫が仕事に出ている間を見計らってやってきた地主に騙されて、ある祖先の女性は土地の証書をだまし取られてしまった¹⁵⁾。地主は椰子の葉の証文を破棄して白い紙から新しい土地の証文をでっち上げた。この物語には複数のテーマがあるが、ここでは相互に関連し合う三つのテーマ(改良された土地を騙し取る地主、地租査定一場所から空間へ、椰子から白い紙へ)を概観する。1850年代から25年間トラヴァンコールで働いた宣教師サミュエル・マティアはその著書『トラヴァンコールの原住民』(1883)の中で次のような事例を記録している。

あるパラヤはナーヤルからジャングルの中の土地を抵当として手に入れ、木を切り払い、種を蒔いて、百ル

ピーの価値がある土地に改良した。するとナーヤルが男を訪ねてきて、土地の証文と60ファナを持ってきたら、土地をその男の名前で登録してやると言った。ナーヤルはその後、新しい書類を作って文字の読めないパラヤに、これは本物の証文だと言って手渡した。パラヤは喜んでこれを受け取った。ところが間もなくパラヤが切り開いたこの土地は別の男の名前で登記されてパラヤから取り上げられてしまった。この貧しい男は不正に対してなすすべが無かった。一方ナーヤルは警察に通じていたので、簡単に騙され抑圧されたこのような貧しい人々に対してどんなことでもできた (MATEER 1883: 311)。

1992年に私は三種類 (1907年, 1946年, 1989年) の土地台帳を書写するために役場と登記所を訪ねていた。この地域の近代的地租査定の基礎となった1907年版の土地台帳が作られる前にプラヤたちの祖先たちが持っていたと主張する「椰子の葉にかかれた」土地の証書について登記所で尋ねたところ証書は椰子の葉に書かれていたがおよそ125年前 (1867年前後か?), 椰子の葉の証書はすべて破棄されて新しい証書が作られたという。土地査定は人口調査, 地図, 紙の証書と同時に導入される。最終的な土地査定には1907年と記してあるが1870年代には測量が始まっていたらしい¹⁶⁾。19世紀の半ばから徐々にその姿を現しつつあった近代的統治制度が導入した地租査定から作り出された新しい証書を, 不可触民たちは白い紙に書かれた「偽の証書」(kalla pramānam) と名づけていた。土地所有の証拠が印された媒介が椰子の葉から白い紙へと切り替えられた歴史的事実が本物から偽物へのすり替えとして語られている点は示唆的である。(第二部で見るように導入されたフォームが認識と実践の双方に決定的な役割を果たしている。)

椰子の換喩 (メトニミー) はケーララの人々の日常に幾重にも重なりながら社会的世界に姿を表す。ケーララの景観は密集して茂る椰子と特別の関係を持っている。人と同じ長さの寿命を持つ椰子の木は, 生きた人の換喩でもある。神々に捧げられて割られる椰子の実は人の頭になぞらえられ, 土葬された死者のへその上 (あるいは火葬された死者のへその位置) に植えられる「死者の椰子」(chudala tēngu) は死者の象徴ではなく延長である (UCHIYAMADA 1998)。南インドでは特定の身体の質料と特定の土地の質料の間には親和性があることが知られている (DANIEL 1984)。特にケーララにおいては死者が家の南側の畑地の中に埋葬されてきたこともあり, 土地と身体の質料同一性は可變的であるがケーララの人々の人間性形成に特別な意味を持ってきた (UCHIYAMADA 2000)。ケーララの日常に近代的統治の技術と共に入ってきた白い紙は, 「場所の記憶」とこれに深くかかわりのある「身体の記憶」¹⁷⁾ との関係が必要としない新しい土地所有関係を記入する媒介として使われている。固有の場所を抽象的な空間へと翻訳する測量が行われ, 白い紙の上に地図が書かれ, 土地台帳に所有者名が記入され, 両者は一組として新たに作られた役場と登記所に保管され, 土地所有者に与えられる土地証書の原本となった。近代的統治はメトニミーとしての「椰子の葉」に凝結した身体と場所の記憶を消去して, 白い紙の上にインデックスとしての土地の空間的位置と面積を所有者名と共に土地査定台帳を書き込み続けている。この過程は何度も繰り返しながら, 近代的地理と近代的所有関係を社会的世界に書き込んでいる。土地が場所から空間へと徐々に翻訳されてゆく中で失われていったのは土地と人の相互的關係と土地を媒介とした死者を含めた人と人の相互的關係である¹⁸⁾。近代統治制度から排除された古い場所の記憶は, 祖先の宿るカーヴと呼ばれる人々が畏れる木々から成る茂み (荒森) の中へ, 祖先を祭る粗野な儀礼の中へ, 土地無しが語る祖先と土地の物語の中へ, 新しい住人が苦しむと噂される土地の祟りの中へ過剰として追いやられた後, 無視できない「迷信」として再びケーララの社会的世界に入ってくる。例を一つだけ挙げる。

不可触民のクラヴァはトラヴァンコール中部において比較的広いテリトリーを持っていたことが知られている。彼らは近年ナーヤル、イーラヴァ、シリア派キリスト教徒たちによって合法的あるいは非合法的にその土地を取り上げられてきたが、それでも元「奴隷」であったパラヤに比べてクラヴァが長い間土地を守ることが出来たのは彼らの土地に祭られていた神々が恐れられていたことと無関係ではないだろう¹⁹⁾。しかし農地改革以後クラヴァたち急速に土地を失いつつある。ナーヤルたちがクラヴァの土地を奪う場合、クラヴァの神々が棲むカーヴを切ることはしないでこれを「飼いならす」戦術が採られた。新しい土地の所有者たちはクラヴァの祖霊を追出すのではなく土地の神として祭った。奪った土地が特に強力な力を帯びた場所を含んでいた場合、ナーヤルやイーラヴァたちが宗教法人を作り、クラヴァの祖霊をヒンドゥー教の神に読み替え、カーヴをヒンドゥー寺院に作り変えている例が多く見られる。このようにして作られた宗教法人が、以前クラヴァたちが独占的に使っていた土地の法的所有者になっている例もある (UCHIYAMADA 2002)。しかしこのような寺院における支配的カーストの覇権は完全なものではない。あるクラヴァの祖霊をヒンドゥー化した女神を祭ったある寺院では、正午や正子のような時間のサイクル中に現れる境界に封じ込めたはずの古い場所の記憶がクラヴァの老女の身体の動きを通して顕われた。(UCHIYAMADA 1999b)。またクラヴァを追出して作られた「クラヴァのカーヴ」と呼ばれるあるヒンドゥー寺院では、階位が低く山の民と関係が深いキラータンというクラヴァの神を、抽象性の高いヒマラヤのカイラーサ山に住むシヴァに読み替えることが試みられていた (UCHIYAMADA 2001, 2002)。しかしキラータンの社でシヴァが祭祀されたがキラータンは山の民との関係も失っていなかったからナーヤルたちが所有を始めた「クラヴァのカーヴ」寺院におけるキラータンの性格は曖昧で両義的なものだった。このような変容は前近代から近代へと進化する直線的なものではなく、否定する側(新しい地主)が否定される側(「迷信的」な不可触民)の本質を部分的に体現してしまう可能性を常に持っている²⁰⁾。

2. 4 生きられた過剰

私が住んでいた1992-1993年当時、不法占拠者たちはその60年前まで村外れのじめじめした低地に住み、地主の田んぼで働いていたという。彼らの祖先はナーヤルの地主から村外れに3.8エーカーの土地を与えられていた。そこには祖霊の森(カーヴ)、祖霊の池、蛇神が棲む蟻塚があった。1907年の地租査定台帳に付随する地図にはこのカーヴと池が記されている。カーヴと池は今でも鉄条網越しに見ることができるが、1989年に作られた三度目の地租査定台帳に付属する地図からカーヴと池は消されている。このように最初の土地査定では古い場所の記憶が地図に記入されたカーヴと池の形で残されていたが、最も新しい地図では場所の記憶を担っていた様々な印は記録されておらず、場所の空間化は完成しているように見える。しかし土地の上のカーヴと池は手を付けられないまま残されていることが多い。購入した土地にカーヴが残されている場合、新しい土地所有者はこれを切り払おうとする。しかし、その土地所有者の家で不幸が起こった場合、カーヴに手を付けたことが不幸の原因のひとつとして思い出される。不可触民たちが祭った祖霊は特に土地と強い結びつきを持っているので、そのカーヴを切り払うことは躊躇されている (UCHIYAMADA 1999a, 2000)。さてプラヤの奴隷たちがナーヤルの地主から田んぼの近くに土地を与えられたという証言について説明する。

労働力の確保は、奴隷を使って米を生産する地主にとって大問題だった。労働力が必要な時期は限られていたから、収穫後の籾だけで奴隷たちを養い続けること不可能だった。地主たちは奴隷を賄うために必要な米も金も持っていなかったが土地だけは持っていた。地主は奴隷の集団にまとまった土

地を与え、奴隷たちはそこに住み、田畑で仕事がない期間は与えられた土地で食料を自給していた。(このような奴隷は地主にではなく土地に属したからマティアは「土の奴隷」と呼んでいる。) 近所に住んでいたナーヤルのバスカンピラによると、奴隷たちは与えられた土地を「あたかも彼らの土地であるかのように」(avarute vaka pôle yānu) 耕して生活したという²¹⁾。ナーヤルの地主は何キロも離れた村に住んでいた上、プラヤたちに近づくと穢れるので、このじめじめした村外れの危険な土地には近づかなかった。プラヤたちの土地は穢れによっても守られていた。

支配カーストのナーヤルは19世紀初頭から没落し始め、耕作可能な土地は主にナーヤルからシリア派キリスト教徒の所有へと移って行く。プラヤたちの地主もナーガラージャナードゥに所有していた農地の大部分をじめじめした土地のすぐ近くに住んでいたシリア派キリスト教徒に売り払ってしまう。この時プラヤたちが住んでいた土地の一部もこのシリア派キリスト教徒に売られた。「土の奴隷」は地主にではなく土地に付属したから、シリア派キリスト教徒に売られた土地に住んでいたプラヤの一族はこの新しい地主の所有になりキリスト教徒に改宗して、彼らの主人が所有した農地で働いた。このようにしてプラヤのリネージはシリア派キリスト教徒の土地で働くキリスト教徒のプラヤとナーヤルの土地で働くヒンドゥー教徒のプラヤに二分される。キリスト教に改宗したプラヤの祖先たちの一部はしばらくこの地に留まっているが、1930年頃同じ村内の別の土地へ移され、そこでおよそ1エーカーの土地を「あたかも彼らの土地であるかのように」耕しながら、シリア派キリスト教徒の田んぼで働く。ナーヤルの土地で働いていたプラヤたちは耕作を許されていた土地をナーヤルに奪われ、家と井戸も地主の親族によって破壊され、じめじめした土地の東半分にあったキリスト教徒に改宗した親族が住む土地に寄宿する。このように一時は3.8エーカーの土地に住み、ナーヤルの田んぼで働いていたプラヤたちは、長い時間をかけて没落して行った。農地改革の直前の1967年頃、プラヤたちは1家族だけを残してこの土地から追われる。ナーガラージャナードゥに隣接するパーリムードの交差点で高利貸しを営む低位カーストのイーラヴァがナーヤルとシリア派キリスト教徒の地主から土地を買い取り引っ越してくる。しばらくして金貸しの妻の皮膚に黒い斑点が現れた²²⁾。イーラヴァの妻の病気は土地の祟りによるものであると信じられていた。イーラヴァが越してきた土地にはプラヤの祖先たちが埋葬された場所が残っていて、夜になると死人たちがさまよう姿が見られたという²³⁾。妻の病気を治すために、様々な治療法方が試された。まず彼女は近代医療による治療を受けたが良くならなかった。次に星占い師、蛇王寺の僧侶、その他の様々な呪術師たちが治療のために呼ばれたという。

2. 5 暫定的まとめ

第一部ではケーララを舞台に対立する開発の記憶について述べた。一つ目はケーララの特異な社会統計に夢中になっている外部者が記憶するケーララというモデル、二つ目は農地改革についての対抗的記憶。不法占拠者たちによると、彼らは農地改革によって「所有していた土地」を失った。この記憶を成立させている土地理解においては身体と場所の相互的關係は重要な意味を持っている。開発体制の土地理解では、土地は換喩的な連続性を失い、経済的価値を付与され、空間化され、身体から切り離され、土地査定を基礎とする分割可能な個人の所有物へと翻訳されている。一方「農地改革の前には広い土地を持っていた」という不可触民たちの記憶は、農地改革によって近代的土地所有制度が完成した事実およびその経験と切り離せない。彼らは私的所有物としての広い土地を持っていたのではない。彼らは身体と場所の相互的關係を通して作り出してきた土地との関係を、彼ら自身が「偽の証書」と呼ぶ白い紙を媒介とした近代的土地所有と混同させながら遡及的に記憶している。ナーガラ

ージャーナードゥ周辺では、おそらく1870年前後に最初の地租査定が始まり、それから始まる一連の過程を完成させたのが農地改革だった。農地改革によって元「土の奴隷」であったプラヤやパラヤたちはまず「土地なし」と定義され土地から追い出され、近代的土地所有制度の枠組みで10分の1エーカーの宅地だけを与えられて「土地持ち」になった。農地改革後に起こった土地の祟りとして理解される様々な出来事は、近代的土地所有制度のグリッドの外に残された場所と身体の相互的生成関係が、開発の記憶からはみ出した「場所の記憶」と「身体記憶」として、鉄条網で囲まれた土地の周りをうろうろ歩く不法占拠者たちの身体に担われた「迷信」として、あるいは合法的な土地所有者の身体に現れた斑点として存在し続けている。これは場所が空間化する過程で身体性を失った死霊が新しい身体性を獲得して行く過程である。長期的にはこれを空間が場所化する過程であると考えることができる。第二部では開発の観察者の対場を離れて開発官僚システムのフィールドの奥へと入って行く。開発プロセスについての非科学的（あるいは反科学的）記述に関心がない読者は以下の記述を読み飛ばしていただきたい。

スウェーデンの官僚システムを研究したバーバラ・ツァールニアフスカは、予算編成のプロセスを舞台のメタファーを使って記述している。彼女は予算編成のプロセスは儀礼的である主張するのは不十分である、予算の内容が儀礼化しているのだと主張する。ツァールニアフスカによる社会保障事務所に勤務する職員の経験は次のようなものである。職員たちは官僚制度の制約に縛られずにニーズに基づいた自由な予算案を作るように言われる。これは予算枠が決められた後に具体的なプランを作る官僚システムで通常行われているプロセスの反対である。しかし職員たちが作成した自由な発想に基づくシャドー予算案は、上司の元に集められた後お蔵入りして決して使われることが無い。「宿題」を持って職員たちは上司の部屋に集まる。上司はにこにこ笑っているが、その雰囲気は懲罰的な「学校」を思い出させる。「さてマリー、今度は君が宿題を見せる番だ」と上司は言う。予算は成立すればキャビネットにしまわれる。その予算が再び取り出されるのは、翌年の予算案を作る時である。前年度の予算書は予算を書くプロセスを舐める（CZARNIAWSKA 1997: 122-141）。ツァールニアフスカの議論から本稿の問題意識に関連した二つのテーマを取り出そう。第一に、ヒエラルキーの上方にいる誰かがこのプロセスを支配しているように見えるが、誰もこのプロセスを支配していない。殆ど自動化している図式の転写がこのプロセスの秘密を握っている。第二に、官僚システムの中で働くアクターたちのアクションを決定付けているのは舞台装置である。この舞台装置のあちこちにも同じ図式が繰り返して現れる。第二部ではこの二つのテーマを念頭に置きながら、官僚主導の国際開発研究機関における図式と舞台装置の効力について考察する。

3. 開発の記憶 2：開発体制の中で働く

第二部では開発体制の中で働く歯車となった私個人の経験をこの体制から離れた後に回想しながら書いた²⁴。「フィールド」は東京にある政府系シンクタンク。ここでフィールドというのは、フィールドワークのフィールドよりはブルデューの言う比較的安定した諸性向（dispositions）を持ったフィールド（例えば、政治的フィールドや芸術的フィールド）と呼ばれる集団的ハビトゥスの母体となる場の意味に近いが、この両者の性格を同時に持つものとして理解する。人類学者でもある私の実践のフィールドは私がサラリーマンとして埋め込まれながら働いた官僚的フィールドだった。参与観察の期間は1995年8月から2000年4月までのおよそ5年間。日本の開発体制の中で社会人類学者が働くこととはどのような経験であるかについて、そのフィールドの性向を伝えるためにインフォーマントのモードで

しばらく語る。

3. 1 開発体制の中で歯車になる

私は1995年8月におよそ11年ぶりに日本に戻りある中央官庁所管の開発関係機関（以下仮称サイド）の研究者として勤務し始めた。サイドは世界に日本の経済マネジメントの経験を発信する目的で、財界の資金的援助を得て1990年にこの中央官庁によって創設された。面接のために一時帰国した際、私はサイドが日本から世界へ向けて日本の優れた開発マネジメントシステムを発信する開発研究の大学院大学の前身となる機関だという説明を受けた。当時は日本の奇跡的経済成長の秘密は日本的マネジメントシステムにあると信じられていた上、日本の経済力はそう遠くない将来アメリカを抜くだろうと思われていた。私に期待されていたのは、社会人類学の立場から開発研究に特化した大学院大学の設立に力を注ぐことだと理解した。私より一年前に赴任していたもう一人の研究者は「ここはノーアイデアでインチキ」が口癖だった。この研究者はスタッフミーティングの際に窓の外を見ることが多く、一年後には大学に移って行った。私はサイドのその当時の状況は確かに中身が薄いとは思ったが、大学院大学の前身だからとの説明を鵜呑みにして（以下で見るオネッティの『造船所』の詐欺師や主人公同様、疑わしい説明を自分に信じさせながら）その将来性に賭けて留まることにした。

半年ほどが過ぎて三人目の研究者がリクルートされてきた。彼はサイドの事務方や官僚には研究は無理だと考えていて「付き合いはミニマム」を行動の指針にしていた。私はこの三人目の研究者と二人で当時の事務系上司とノンキャリアの事務局長に理想の大学院大学のあり方や理想の研究系上司候補について何度も話し合いに行った。サセックス大学のIDSの設立に関わったある教授から、最初が肝心であること、設立当初研究者が七年は辞めずに研究できるような環境作りを目指したこと、研究活動の自律性を確保するために資金源を多元化したことを聞いていたので、これらの点を強調した。事務局長は「分かりました。検討します。」と答えたが、何の返答もしないまま本庁に帰っていった。私は研究系上司に関しては、国際的に開かれた研究所にするためにはインド人が良いと事務系上司に話した。同僚の研究者が経済学者だったこともあり、LSEの経済学の教授で英国上院議員でもあるメグナッド・デサイ卿や後にノーベル賞を受賞するアマルティア・センのようなワールド・クラスのインド人研究者をリクルートして欲しいと要望した。暫くして事務系上司に呼ばれ「もっと良い人が見つかりました。その人はZさんです。」と説明を受けた。その人は、ある裕福な財団の参与だった。私ともう一人の研究者は官僚の基準と研究者の基準の乖離に大きく失望した。

新しい研究系上司は私を呼んで研究所には新しい名前と新しいエンブレムが必要だと言って身振りを交えて二匹の蛇が絡まった意匠を説明した。彼は名付けと意匠付けについて熱っぽく説明したが、名称と象徴に代表させる中身については何も言わなかった。彼は私を呼んで事務系上司を助けてやろうじゃないとか、財布の紐を簡単に解かないある都市銀行から出向していた財務担当のXを外してやろうとか言った。またある時は、もう学生じゃないのだからいつまでも勉強はやめろ、我々のようにPh.D.をとった人間はリーダーとして人を指導して行かなくてはならないと言った。その人が研究系上司になって一年後、三人目の研究者は大学に移って行った。研究系上司はリクルートしてくれた事務系上司を助け、事務系上司は二年ほどで多額の退職金を手に本庁に戻りより良いポストに就いた。一方、事務系上司は研究系上司の給料の等級を大きく引き上げ、彼をサイドの理事にした。Xは財務担当から外され、研究系上司が予算を使いやすい環境が作られて行った。数年後、Xは当時の事務

系上司から、サイドに残るなら仕事が無いから給料カット、それが嫌なら専門家として海外に行けという選択肢を与えられ、サイドから姿を消した。私が着任して三年が経過した頃、サイドを巡る経済的環境は悪化し続けていた。人材を出向させていたいくつかの都市銀行の財務状態は芳しくなかった。1998年から毎年ODA予算がカットされた。研究系上司は、ほかのセクションの事業を縮小させることによって研究事業を拡大させようとしていた。予算規模をさらに拡大するために、研究ではなくコンサルタント業務の下請けをする研究員も雇われた。この頃には大学院大学の構想は殆ど消滅していたと思われた。しかし、開発研究の大学院大学設立という標語は、サイドの予算請求とその消化に正当性を与えながら時間稼ぎとして使われていた。

舞台を1995-1997年頃に戻そう。大学院大学設立準備機関としてのサイドが埋め込まれていたフィールドは、内部の研究者の立場から見た範囲内で思い返す限り三重の障害を抱えていた。第一に、「日本の奇跡」は奇跡ではなく構造的欠陥を抱えたものとして理解されはじめていた。これは具体的には政府開発援助の予算の縮小と、大企業からの賛助金の減少として経験されていた。第二の障害は、文部省による大学院大学構想に対する反対だった。文部省は他の省庁に学位授与の権限が与えられることに強く反対してライバル省庁直属の学位授与機関が出来ることを阻止していた。第三の障害は、内部にいる者たちがより直接的に経験した内在的な障害だった。私がサイドで働き始めたばかりの頃、当時財務担当だったXは、サイドがすぐに大学院大学になれば政府開発援助予算が使えなくなるから、ならない方が良くと言っていた。このような発言、中身の薄いシンポジウム、見た目が重視される研究報告書などのパフォーマンスに繰り返し出てくるパターンから推論すると、大学院大学設立構想は予算請求と消化のアリバイだと思われた。サイドの中においても外においても、大学院大学ができなかったのは文部省の反対によるとされている。しかし内部にいた研究員たちの多くが経験したのは、異なったパフォーマンスの背後にいつも同じ虚空があったこと、このパフォーマンスを繰り返しては研究者でなくなってしまうという危機感、パフォーマンスの背後の虚空を隠すように躰けられるもそれに抵抗を試みた経験である。

私は2000年3月末に事務系上司に呼び出されて、お前の仕事は役に立たないから4月から給料を20パーセントカットすると言われた。前年の夏いつもあるはずの定期昇給が私だけ無かっただけでなく、私が書いた決裁は上司たちによってことごとく否定されて割り当てられていたはずの研究費は使えなくなっていた。4月末の連休二日前に事務系上司に再び呼び出され、お前のような者を雇うのは重荷だから辞めてもらいたいと言われた。5月1日付けで主任研究員の職を解き、連休明けから彼の監督の下で単純作業をしてもらうと言われた。事務系上司は、しかしあなたも世間体があるだろうから、実際は単純作業をしてもらうが、外向けには今まで通り「主任研究員」の名刺を使っても良い、と付け足した。私は翌日辞表を提出した。私はその後あるイギリスの大学の社会人類学部に仕事を見つけて9月の終わりに家族とともに日本を出た。2000年12月から翌年1月に掛けて大学の研究室でサイドでの経験を回想しながら、これを擬似フィールドワークへと翻訳を試みつつ対象化して記述を試みた。1992-1993年にケララでフィールドワークを行い、その後ロンドンに戻り博士論文を書き上げた時と同様のパターンで、すなわちフィールドから離れ、イギリスの大学で社会人類学の日常に復帰すると同時に、ある性向を持った英国社会人類学のフィールドからサイドが置かれていた日本の官僚的フィールドを振り返って民族誌を書くという方法を使って本稿の元になった民族誌を書くことを試みたが、民族誌のフォームでこの官僚的フィールドで歯車として働いた経験を描き出すことには限界があった²⁵⁾。私は日本の官僚的フィールドの中で働きながら開発官僚について何度も書こうと試み

たがうまく行かなかった。同僚たちも同様の経験をしていた。官僚システムを対象化することは困難だったがケララの民族誌を書くことはそれほど困難ではなかった。これは私が埋め込まれていたフィールドの性向を考える上で示唆的である。日本の官僚的フィールドには官僚システムについて記述することを妨げるような力が働いているのだろうか？問題の核心を先取りして疑問文の形で提出すれば次のようになる。「権力のメカニズムを再生産せずに権力の民族誌を書くことはいかにして可能であるか？」イギリスの大学のフィールドで直面した官僚研究を困難にしている要因について述べる。

第一に大学のフィールドにおける社会人類学の実践自体が官僚的フィールドに埋め込まれていたために、対象化すべき諸関係を分有したまま、それを記述することには無理があった。例えば、社会人類学部の研究費と教育にかかる費用の配分は、両者の効用と効率が官僚的フィールドの中で査定され、査定のポイントに応じて予算が増減する仕組みになっていた。ブルデューがアイロニーを込めて「植民地的科学」と呼んだこの社会科学の実践は、国家への依存と引き換えに社会からの自律性を獲得していたから、社会へ向ける批判的眼差しを、その批判的实践を可能にしているフィールド自体へ向けることは困難だった（BOURDIEU 1993）。私の場合はイギリスの大学から給料を貰っていたので、日本のことを書くことは容易になっていたのだが、日本の官僚組織をエキゾチックに書くことが問題となりにくいフィールドの性向の中で主要な図式を転写しながら日本の官僚的フィールドについて記述することには抵抗があった。

第二の障害は研究対象との関係に関するものである。官僚組織を含めた近代的組織を研究対象とした社会人類学論集を編集したハーシュとゲルナーは、組織の中でフィールドワークを行う人類学者は「生徒」であるという。外部者である人類学者は生徒として組織の内部に入り、核心に迫り、ネーティブの視点を獲得して、民族誌を書く（HIRSCH and GELLNER 2001）。イギリスの大学の（未来の）職業的社会人類学者たちが官僚組織の中で名誉生徒になる時、彼らは何重もの特権(英国の大学、プロフェッショナル、階級)を隠すことなくこの役割を演ずる。イギリスから帰国して日本の開発官僚組織に入った私の立場は、ハーシュとゲルナーが想定する特権的な生徒ではなく、人類学者として帰る場所を持たない一人の現地人職員だった。限りなく深く参与するが観察を可能にする物理的・精神的自律性を持たない私のような参与観察者は、いかにして自己と不可分の官僚システムを記述できるのだろうか。自律性を持たなかった私は客観主義的自律性を前提としないオネイリック・モードを使うことにした。

カフカは官僚制度の中で働き、そのシステムの働きを実験的なフォームで書き続けた類稀なインサイダーである。カフカは夢の言葉を使って官僚システムを終わりのない繰り返しのプロセスとして描いている。私は以下においてカフカが『審判』を書く上で用いた図式と終わりのないその小説のフォームを実験的に応用して開発官僚組織のフィールドの性向と図式転写のプロセスを描くことを試みる。

3. 2 オネイリック・モード

オネイリック (oneiric) あるいは夢のモードで見ると開発官僚システム（より厳密に言うと文脈の中に現れたオネイリックな開発官僚システム）には重複しながら繋がっている三つの重要な属性がある²⁶⁾。一つ目は対象とそれを位置づける理性のグリッドが不可分であること。これに関わる比喻を一つ挙げる。ジンメルは「絵画の額縁」という短いエッセーの中で、額縁が絵画をコンテクストから切り離し、それに芸術作品としての統一性を与えていると主張する。額縁は外側から内側に向かって傾斜していて、鑑賞者の視線を自然にその境界線の中へと導く（SIMMEL 1994）。鑑賞者は額縁に鑑賞す

る視線を導かれていることと、額縁が絵画を統一性のある芸術作品にしていることに気づいていない。この「絵画の額縁」は以下で述べる決裁文書のフォーム、ロジカル・フレーム分析のフォーム、机の配置のパターンなどに転写した形で現れる内在的な支配的図式の寓喩である。二つ目は官僚制度が体现する合理性のグリッドが権力の働きにより歪んでいることである。カフカの小説では部屋は歪み、遠く離れているはずの領域が思いがけないところにある裏口で繋がっている。この二つの属性は深く結びついている。ヘーゲルは、国家は合理性を代表してミドルクラス出身の官僚はこの合理性を最も良く体现していると考えていた (HEGEL 1952)。ヘーゲルによる官僚理解は、主流の政策研究言説とサイドにやってきた官僚たちによって（時には暗黙に時には明示的に）共有されていたが下級職員たちはこれを必ずしも共有していなかった。一つ例を挙げる。

所管官庁においてもサイドにおいても、(エリートクラブである国連安全保障理事会は別にして) 国連の評判は良くなかった。ある大使は、OECDは先進国がメンバーだから良いが、国連は途上国が入っているから性質が悪いと言った。ある事務系上司は、NGOの集まりを「猿の集団」と呼んだ。別の事務系上司は、ある女性職員をスタッフミーティングの最中にしかりつけた時「客観性に欠ける」、「理性が無い」、「恥ずかしい」等のキーワードを使った。また別の機会にある女性職員がこの事務系上司の給与と退職金がカットされないのに何故一般職員の給与だけがカットされるのか質問したところ、彼は、給料が高いのは資質が優れているからですと答えた。彼の説明によると役職についている人たちは資質が高いから給料が高く、役職についていない人は資質が低いから給料が低いということだった。彼のナラティブによると職級の高低と資質の高低のインデックスだった。彼女はそれ以上質問せず黙ってしまった。他の下級職員たちも沈黙したままだった。興味深かったのはこの女性職員が後である上司には愛人が二人いて別の上司には一人いるのが私には掛かってくる電話の声で分かる仲間内で話したことである。開発官僚たちは植民地経営で重要な役割を果たした人種の概念の連続線上にあるキーワードを使いながら、合理的精神を持たない第三世界や職員たちを非難し続ける一方で、国連安全保障理事会の常任理事国になりたい (フクヤマが歴史を進化させる動因として挙げている) 「優越願望」を隠そうとしなかった。リスクを覚悟で上司に質問をした女性職員が上司たちの愛人たちについて話したことは方法論的に意味深い。重要なことは上司たちに愛人たちが電話を掛けてきたかどうかを確かめることではない。官僚システムの底辺に位置する職員たちが、主管省庁が合理的だとも官僚が合理性を体现しているとも考えていなかった事実、合理と非合理の結婚、非合理の合理化が起こるフィールドの性向を記述できるような枠組みを獲得できるかどうかの方法論的により重要である。

官僚システムの合理性は、歴史を一方向に進む非歴史的な目的論的進化の過程と整合性を持つ。この性向は、予測に基づいて翌年度の予算案を立て、承認された予算の費目を(中身は何であれ)行使して、それに機能主義的説明を付けることを可能にしている。官僚システムは一見して合目的な進化論的歴史観を持っているように見えるが、実際は歴史的ビジョンを持っていない。私が1995年に着任する前に、サイドでは大学院大学のカリキュラム作りを終えていた。そのカリキュラムの内実が具体的に何であるか知らされないまま、私はそのカリキュラムに沿って大学院教育用の教材を作るという説明を使って研究が出来ると教えられた。教材作成という予算の費目があり、研究員が使う予算はそこから出され、研究活動はすでに作成されて完成したカリキュラムに基づくものであると関係省庁の担当者に説明されていた。ナラティブは関係の無い出来事を結びつけて始まりと終わりのある客観主義的説明を作り出す。官僚システムは終わりの無いプロセスを一方で繰り返しながら、他方で説

得のために始めと終わりのある説明を書き続ける二重のプロセスである。

開発官僚研究に一つ前例がある。デンマークのある地方自治体（オールボーグ）において環境にやさしい参加型公共交通システムの政策がどのように作られ実施されたかについての詳細な民族誌的ケーススタディを積み重ねることを通して、権力と合理性の関係を明らかにしようとしたベント・フリヴバグの民族誌は、官僚システムが合理性として代表しているのは、権力が合理化した非合理的な手続きであると結論している（FLYVBJERG 1997）。公共政策がトップダウンで作られ実施されて行った過程は、官僚システムが代表して見せた参加を重視した公共政策実施のナラティブとは別物である。しかしオールボーグというインデックスはOECD推奨の開発モデルとなり、住民参加型の持続可能な都市および公共交通政策の一つのパターンとして国際開発体制の中で記憶され消費されている。更に1994年5月24-27日に開催された第一回「持続可能性な都市と町」ヨーロッパ会議のホスト都市となり、会議最終日にはヨーロッパの80の地方自治体が「オールボーグ憲章」に署名して、モデルの象徴的価値は更に高まった²⁷⁾。モデルとなったオールボーグはレプリカを生み出す強力な動作主になっている。

話を元に戻そう。合理化された自己表象は、内と外を厳格に区別して内部を隠蔽して恥ずかしくない体裁をつけるから、この自己表象には愛人やパーティー用の高級ワインが出てくることは無い。これとは対照的に、カフカの『審判』に登場する判事や弁護士たちは与えられた職務の意味を問わずにこれを忠実に果たしながら、ポルノを読み、愛人を囲い、歪んだ条理の中で生きている。カフカの方法は「対極の結婚」を記述できる点が特長的である。一つの比喩（あるいは類似）を提出する。カフカと部分的に同時代を生きたグロスは、その絵画によるワイマール共和国制度批判の中で、歪んだ条理、暴力装置、娼婦、欲望でいびつに膨らんだ頭を持った軍人、司祭、教師、亡霊のような人々を一つのキャンパスの中に描いている。*Deutschland, ein Wintermärchen* 『ドイツ、冬物語』（1917-1918）の背景は、合理性が権力によって捻じ曲がった1910年代終わりのワイマール共和国。ナショナルな景観は混乱している。森、大聖堂、労働者、時計、工場などが断裂した複数のパースペクティブと共に背景を構成している。中央に頭のはげた小市民風の男がテーブルに向かってビールを飲みながら食事をしている。テーブルの上には読み止しの新聞（彼は新聞を通して共和国を理解している）と配給のクーポンが置かれ、足元には犬がうずくまっている。スケールの異なる裸の女が男の右肩に手をかけている。男はナイフとフォークを胸の前で握り締めたまま食べるのを止めて（崩壊して変容しつつある共和国の日常を忘れて）娼婦との関係を夢想している。この男の下方に三人の男たちが描かれている（『審判』に繰り返し出てくる権力の三角形を構成する様々な三人組を思い出してもらいたい。）中央に立っているのはワイマール共和国軍人、向かって右は教師、左は司祭。教師は黒眼鏡をかけているので何を見ているのか判らない。軍人と司祭は彼らの心はその職務とユニフォームから離れている目をしている。ワイマール共和国の民主主義を支える軍隊、教育制度、道徳システムは、欲望によって侵食されている。この「はげた男」はシステムの中の私、事務系上司、研究系上司でもある。オネイリック・モードは、現実を公私に区別せず、両者を同時に同じ枠の中に描き出すため、公私の思いがけない近さと、時代のムードを記述することが可能となっている²⁸⁾。このモードは思いがけないところで政治的印に目を留めることこそ政治哲学の基本だと考えるルフォールの民主主義研究の方法論とも重なっている²⁹⁾。

オネイリック・モードから見た開発官僚システムの三つ目の属性は、我々が慣れ親しんだ目的論的終わりの欠如である。カフカの『アメリカ』では、Kがアメリカ資本主義の中へ入って行きながらそこから逃げ続ける物語に終わりが無い。『審判』ではジョセフ・Kの裁判は結審しない。カフカはシス

テムが生み出すそれ自身についての始まりと終わりのあるナラティブには耳を傾けず、そのプロセス自体の性向を模倣している。ナラティブが終わりを持たされていてもそのナラティブを生み出すシステムはそれ自体内的な終わりを持っていない。終わりが無く過程であり続ける夢モードによるプロセスの記述は、近代化論を生み出した支配的開発体制による「自画像」とも言えるアメリカの独立革命に始まりアメリカの自由民主主義（的帝国）の勝利で終わるフクヤマの「普遍的歴史」への批判ともなりうる。1950年代から1960年代に隆盛を極めた近代化論の復活を宣言しているフクヤマの「歴史の終わり」論はそれが発話されたタイミングが重要な役割を果たしている。古い近代化論が開発のソビエトモデルを意識した政治プロジェクトであったのに対して、フクヤマの新しい近代化論は、アメリカという自由民主主義的帝国の勝利宣言でもあるから、フクヤマがヘーゲルを想起させながら何度も繰り返し替えているエティモス論（認知されたいという崇高な願望が人類を自由民主主義に導く）は修辭である³⁰。「歴史の終わり」論が1989年に*National Interest*誌上で発表され、1992年に単行本が出版されたそのタイミング自体が歴史の終わりについてカテゴリーの外から説明している。言い換えると身近な事件が舞台装置に内在する図式へと翻訳され、それが更に人類の普遍的歴史を描いた作品の要として転写されている。フクヤマの『歴史の終わり』が想起させるのは、第一に、従属論、生産様式結合論、フェミニズム、ポストコロニアリズムによる批判によって、躊躇せずに処方することが難しくなっていた近代化論の方法とそれを生んだフィールドの性向、第二に、終末論的歴史の中に現れた自由民主主義の勝利の徴である。この点においてフクヤマのテキストは極めて神学的である。古い近代化論が目的論的であったのに対して、フクヤマによる新しい近代化論が終末論的であることは、新しい国際開発体制のフィールドの性向を理解するうえで重要である。この開発の支配的自画像はキリスト教的終末論とマルクスの歴史観の図式を転写しながらアメリカ革命という終わりの始まりを支配的開発の歴史の中で想起させようとする。このような「開発の美しい記憶」に心を奪われてシステムを満たしている転写する図式と自然化した図式の転写を見落としてはならない。コンテキストをサイドに関連付けながら先を続けよう。

私はサイドで大学院生たちを対象としたフィールドワークプログラムを運営していた。開発官僚たちは「フィールドワーク」というタイトルは使えると考えていたが、その内容については懐疑的だった。このプログラムは学生たちを島嶼東南アジアのある田舎町でホームステイさせた後に、そこで獲得した視点(理想としたのは予定的なTORの対極にある発見的にそこで生活する人々の性向へと向かおうとする視点だった)から開発行政機関およびそれが産出するナラティブを批判的に見るというやり方を採った。ある事務系上司は学生たちをホテルに宿泊させて(第三世界の家は不衛生だというのが表向きの理由だった)、日本政府の援助によるプロジェクトを日本の専門家に案内させるべきだと考えていた。私は事務系上司に「あなたもホームステイしませんか？」と誘った。「結構です。」とその上司は答えたただだったが、その後上司たちは決裁のプロセスを使って私の仕事に否定的に介入して、私はコースダイレクターから外された。私が辞職した直後からフィールドワークのプログラムを一緒にやっていた同僚の研究者Sに対する監視が強化された。Sは減給になり、彼の研究会は介入を受けた。Sは研究会の監視を強めてきた開発官僚の言葉を次のように記している。「最初は（Sの研究会を）まかせた。研究所はふつう通りやっていけば問題ない。ただ、内山田研究会から始まったが、ふつうの常識からいえばほど遠い、あまりにもひどい報告書があがってきた。それが二つ続けてきた。コメントせざるをえない。世間に出せない。」これに対してSは「なぜあなたは自分の視点を研究会に来て発表しなかったのか」と問う。開発官僚は「それはまかせておいたからだ。しかしとんでもない結果な

ので介入した」と答える。ダイアログのプロセスが変化を引き出すと信じていたSはディスカッションを試みて言う。「研究会に来てその視点を提供してくれないか？」官僚は「そこまでしたくない」と答える³¹⁾。この事務系上司はすでに書かれた決裁文書に対してシステムから与えられた構造的上位の位置から介入したが、どう発展するか判らない能動的相互作用のプロセスの中に定かでない立場から参加することは拒み続けた。

この事務系上司が「あまりにもひどい」と言っているのは、私が代表をしていた「ジェンダー」研究会である。彼らは「ジェンダー」という発話が利用できる限りにおいては関心があったが、ジェンダーの問題意識が官僚システムに向けられることを嫌った。この研究会は3年間続けたが、最後の報告書の内容に事務系上司が介入した。一年遅れて開始した「文化と開発」研究会は研究系上司の介入を受けて3年目は殆ど何もできなくなっていた。「ジェンダー」研究会と「文化と開発」研究会はアカデミックな人類学のフィールドから主要な図式を転写していた。大学院生向けのフィールドワークコースも人類学のフィールドから図式を転写していた。サイドで私が期待されていたのは、フランクとチェシンがやったように開発介入を正当化するインデックスを人類学風のナラティブで修飾することであり、ジェルが死の直前、迫り来る死と競争しながら一気に書き上げた *Art and Agency* (1997) の中で人類学的であるとは一体どういうことなのか問いつけた問題とは何の係わりも持たないことはよく判っていた。ジェルは私がサイドに就職するに当たって推薦状を書いてくれた二人の人類学の教師のうちの一人だった。人類学的であるとは何かを考えるに当たって私はサイドにおける分散したジェルのエージェントになっていたのかもしれない³²⁾。事務系上司が異なるフィールドの諸性向から生まれた認知と実践の図式を持ち、異なる動作主のエージェントであり、自らが動作主であったのと同様に。彼はアカデミックな人類学のフィールドに足を踏み入れることを拒み、私は官僚的フィールドで開発介入を人類学風に偽装することを拒んだ。

3. 3 決裁文書

1995年の秋着任したばかりの私は、インターネットを導入する必要があると同僚や上司に説明した。管理職や当時の事務系上司はインターネット導入に反対だった。もしインターネットを導入すれば下級の職員たちが上司の検閲を受けずに直接海外と情報の交換を始める可能性があった。事務系上司にインターネットを導入するメリットを説明するように命令されて、その利点を説明した文章を作成して提出した。その後もインターネット導入についての会合が何度も持たれ多くの資料が作成された。三ヶ月後、事務系上司は、次のような結論を下した。インターネットの利点は理解した。しかし現段階では時期尚早である。第一に海外の一流の先生は毎日インターネットを使っているが、サイドの職員にインターネットを使いこなすことは出来ない。第二に海外との通信が必要だったら電話かファックスか無線を使えばよい。数ヶ月の時間を費やして出てきた結果は、システム内の序列を確認した上で今までと同じ方法を踏襲することを再確認したものだ。何も変わらなかったが、ある手順を変えようとした私の提案に対して、何も変える必要が無いことを確認するために膨大な時間を費やしたことが重要だったのだと思われた。事務系上司はこの長いプロセスの中で私を呼んで「官尊民卑」を知っているかと尋ねた。彼は明言しなかったが、問題となっていたのはインターネットを使った新しいコミュニケーションが後で述べるように（ペアーとその上司からなる）権力の三角形を再生産しないことだった。彼は「官尊民卑」のイデオロムを通してこのような態度を注意したのだと考えられる。次の事務系上司が着任した混乱に乗じてインターネットが導入されたのは数ヶ月後のことである。

その数年後に着任する事務系上司によって私は研究員を解任される。

インターネットが導入されるまで海外とのコミュニケーションは主にファックスでやり取りされた。理論的には「決裁」が通ったファックス文章だけが送信されることになっていた。しかし実際には急ぎのファックスは上司の承認を得る前に発信して、その後で上司Xに事後承認を得ることもあった。ある時、私はすでに発信したファックス文章を決裁として上司Xに渡した。翌日その決裁文章は赤で何箇所も訂正されて戻ってきた。すでに出してしまっただけのファックスを細かく直されるのが何度も起こるのを見るうちに、決裁文章を直すあるいは否定することはそれを書いた職員を直すあるいは否定することのメトニミーなのだとして理解するようになった。決裁文書が決裁起案者のメトニミーとなり、赤で上司が訂正した決裁文書は決裁起案者を矯正する。言い換えると著者と作品の関係が転倒する。決裁起案者は決裁プロセスの中で決裁に書かれた作品になる。官僚制度 (bureaucracy) は語源的に書類キャビネットの権力という意味を持つ。サイードで日々書類を書き、書類に矯正される繰り返しのなかにおいて「書類キャビネットの権力」は生きた語源だった。これが可能なのは官僚的フィールドの中で働く社会的エージェントたちパーソンはフィールドの中で分散しているからである (Gell 1998: 96-154)。

サイードは職員がいくつかの暗黙のルールを遵守することを期待した。その中で最も基本的なルールを言葉に翻訳すれば「中身や作業の含意を問わずに前例をコピーする」に近いが、それがどう作用するかについて説明するためにプリミティブなアナロジーを使う。カフカの『審判』でKを逮捕しにやって来る一人の刑事と二人の執行吏は三人で権力の小さな三角形を構成している。彼らは権力の構造を知らないままその構造を実践している。法の執行者であるこの三人は何故自分たちがKを逮捕するのかその理由についても知らない。Kが犯罪を犯したか否かは問題ではない。彼らはKを逮捕しなければ自分たちがひどい目にあうことだけは熟知している。官僚システムの中で有能ではないこの二人の執行吏たちが、後にKが勤務する銀行の物置 (実はこの物置はKを逮捕して審理している司法システムの一部で、隣接した銀行のドアと司法システムのドアを通してつながっている) でお仕置きを受けてうめき声を上げるのをKは銀行の廊下で聞きつける。官僚システムの底辺では一つの行動圏とそれに隣接する行動圏は遠く離れている。しかしシステムの上部では隣接したドアを通して遠く離れているはずの行動圏がつながっている³³⁾。

サイードで働く職員は、『審判』の刑事や執行吏同様、官僚的プロセスの中でその身体で権力の三角形をコピーしながら、中身の分からない形式をコピーすることを期待されていた。このルールを内側から突き動かしていた決裁のプロセスおおよそ次のようなものである。下級の職員が決裁案を作成して直属の三角形の頂点にいる上司に提出する。そこで承認された決裁案は上位の三角形の底辺から頂点へ向かって進行して行く。前例踏襲型の決裁案は上司たちのチェックを通る確立が高い。事務系上司の承認を得て決裁は通る。日常的ファックス文書程度の決裁の場合は二段階の承認を得れば発信できることになっていた。前例踏襲型ではない決裁の場合は、そのまま承認されることは有り得ないから、まずメモを作り決裁に関わる上司に「お伺いを立てる」。上司の観点から見て悪い決裁は、良くなるまで書き直しを命じられる。上司が不在のため「お伺いを立てる」ことが出来ない場合、何日も待たなくてはならないこともあった。サイードは大学院大学の準備機関だったから、少なくとも建前上は前例が無いことをやっていたが、毎日の決裁プロセスは構造的に前例踏襲型だった。ある女性の同僚は、決裁案を作って研究系上司の部屋にお伺いを立てに行く時、自動的に研究系上司におべっかを使い愛想笑いをしている自分に気づいて気持ち悪いと言っていた。また別の女性の同僚は、着任当初

おべっかを使うタイプではなかった上、前例踏襲を理解していなかったので上司によく怒鳴られていた。怒鳴られた職員の中には黙って悔し涙を流す女性もいた。ひどいことを言われてその場では我慢したがトイレで泣いたという女性の元同僚や、悔しくてオフィスを出てから泣いたという男性の元同僚の話はどちらも彼らが辞めてから聞いた³⁴⁾。

決裁という形式を使って日々集団的に意思決定をする過程の中心に、前例踏襲と横並びのルールがあった事実は、この官僚組織のフィールドの性向を理解する上で重要である。この形式は内容を問わずあらゆるプログラムのマネジメントに力を発揮した。「ポストモダニズムと開発」をテーマにしたセミナーやジェンダー研究会も例外ではない。決裁の過程は内容ではなく形式に介入した。形式が内容を支配したからである。「民主主義と開発」が流行した時、このイディオムを外向けに発話した上司は「ここには民主主義はいらない」と下級職員に言った。上司による「ここに民主主義はいらない」という内部向けの発話行為は、サイドが置かれていた官僚的フィールドの性向を映し出している。より厳密に言うと、官僚的フィールドの中の社会的エージェントが分有した認知と実践の両方に関わる図式に深く関わった発話だった。この発話行為が行われた官僚的フィールドの地理にも触れておかねばならない。サイドは皇居の外堀に面した場所にあった。400年の蓄積を持つ日本の官僚的フィールドの中心であるこの場所がもつ特殊な作用がサイドで働く職員たちの認知と実践の図式の中に転移していたのではないか。「民主主義と開発」のイディオムは、権力の三角形を身体的に再生産しつつ発話する限りにおいて利用価値はあったが、既存の権力関係を問う仕方では使おうとすると圧力がかかった。外向けに発話されたジェンダーの概念を組織自体に向けようとする圧力がかかった。だから開発の言説分析を行うとき、ナラティブの枠付けとキーワードを特定のパターンで発話させる官僚的フィールドの性向、その特定の発話を支持する主権（王権）による勅裁、その主権に特権的场所を与える官僚的フィールドの地理学をも同時に理解しなければならない³⁵⁾。

サイドが行っていた様々な事業の中で、最も歴史が古く最もその開発官僚的特色を代表していたのが、問題解決型開発問題作りの普遍的グリッドである「ログフレーム」として知られてロジカル・フレームワーク・分析法であったことは興味深い。ログフレームはプロジェクトの形成、実施、モニタリング、評価のサイクルを問題解決的に分析する強力なマトリックスである。（ジンメル「絵画の額縁」はその比喩となる。）私とほぼ同じ時期に着任したある男性職員は国際機関でログフレームを使った経験を買われてやってきた。面接で五年に一人の逸材と言われたという。期待されていたはずの仕事は（日本の）開発現場でログフレームのアプリケーションを開発することだった。しかし職場でログフレームを開発の実践に応用しようとする上司たちの抵抗を受けた。実践の経験に乏しい上司たちは、実践の経験に乏しいインストラクターを雇って研修を行うことを選んだという。彼はまもなくその仕事から外され事務仕事を与えられた。数年後「オートノミーがないからどうしようもない。」と彼は振り返って言った。彼は一年半を少し過ぎた頃に辞表を出した。一方、研修で教えられたログフレームはリアルな抽象でありつづけた。サイドはそれ自体がメカニカルなフレームワークであった。この客観的フレームワークは開発を専門としない出向職員たちが開発のプロとして働くことを可能にしていた。メカニカルなフレームワークの中では抽象化された同質のフレームワークが、教育プログラムを通して、あるいは制度化された開発マネジメントのプロセスを通して生産されていた³⁶⁾。

3. 4 虚構を共有する

研究系上司がサイドの研究所を対外的に認知させるために始めたプロジェクトの一つが国際開発

研究年報だった。研究系上司は私と三人目の研究員を部屋に呼んで、世界銀行が毎年出版している *World Development Report* に相当するものをサイドの研究部門で出版したいと言った。私は、WDRに相当するレポートを準備するためにはテーマ毎にプロジェクトチームを組み、二年サイクルで文献調査、現地調査、執筆をやるのが良いと提案した。研究系上司は、そんな金も時間も無い、研究員が毎年二つのテーマで二つの章を書く、内容は大体で良い、と言った。中身より見せかけが大切だというメッセージに、研究者として生き延びようとしていた私は大きく失望した。サイドを辞職して日本を去り、この経験をどう言語化できるか考えながらオネッティの『造船所』を読んだ³⁷⁾。

資産家で詐欺師のヘレミアスが経営していた造船所は破産して久しい。主人公のルールセンはこの破綻した会社の代表取締役になる。廃墟の中の執務室に座っていても仕事はなく給料も受け取っていないが苦勞してきちんとした身なりを保とうと努力をしている。手持ちの金は次第になくなり、ホテルの部屋代を滞納し、食事も満足に食べていない。ルールセンはいつの日か会社が更生して、未払いの給料を受け取り、ヘレミアスの一人娘を娶り、ビジネスマンとして尊敬を集める時が来ると信じようとしている。ヘレミアスの嘘はルールセンの嘘である。しかしこの嘘を信じるのが困難になるほどカラーは薄汚れ、靴は擦り切れ、腹は減っている。(ルールセンは数十年前この町でポン引きをしていたことがあったからこの嘘を生き、他者に認められたいという願望を持っていた。) サイドが生産した夥しい数の公式のテキストとサイドから発せられた夥しい数の公式非公式のナラティブが共有する秘密をオネッティの寓喩は捕らえていた。このテキストが想起させたのは、事務系上司に直接監督されながらサイドの年次報告書をまとめる単純作業をやれと命令されたとき、世間体もあるだろうから外向けには「主任研究員」の名刺を使ってよいと言われたことだった。年次報告書編集という合理化する物語を書きながら、偽の名刺を使って自己表象することは、ルールセン(私、事務系上司、研究系上司)が詐欺師ヘレミアス(私、事務系上司、研究系上司の別の役回り)の嘘を共有しながら破滅したのと同じ道筋を辿っていた。指し示す中身を持たないインデックスだけの世界を支えていたのは、増殖する(ペアーと上司から成る)三角形と決裁というプロセスの組み合わせとその中で働く「歯車」たちの欲望だった。三角構造と決裁の *modus operandi*こそ、開発官僚組織のメタナラティブだった。最後に舞台装置について述べる。

3. 5 連帯・意味・主体を生み出す舞台装置

1995年8月にサイドに着任して目に付いたのが机の配置だった。ヒラの職員は別のヒラの職員と机が向き合っている。向かい合った二列の職員の机の端に直角の角度で一つ机が置かれていて、その「シマ」を監督する位置に窓を背にして下級管理職が座っている。向かい合った二列のヒラ職員とその頂点で監視している下級管理職は基本的な三角構造を形成している。この三角構造の隣には同様の三角形が平行して転写している。すなわち下級管理職は窓を背に横に並びながら目の前で向かい合っただけの机を並べている部下たちの列を監視している。三角形の頂点の位置に座っている下級管理者から見ると、部屋の反対側の窓を背にしてミラーイメージの三角形の頂点の位置に座っている下級管理職が見える。(こちらの三角形の頂点とむこうの三角形の頂点が向かい合っている。) その横には同じように転写した三角構造が並んでいる。この空間ではヒラの職員は向かい合ってお互いを監視し合うような座り方をしている。この繰り返しを三角形の頂点に座っている視線が監視するようになっている。更にこちらの三角形とミラーイメージの三角形はお互いに監視し合うように組み合わせられている。決裁文書はこの空間を、小さな三角形の底辺から出発して頂点へ、小さな三角形の頂点から別の小さな三角形の

頂点へ、小さな三角形の群れを統合しているより大きな三角形の頂点へ、別の大三角形の頂点へ、その大三角形を統合した頂点へと一定方向に動いた。重要な決裁文書はサイドを出て下級職員にはどこにあるのか判らない官僚システムを中心へと向かうと信じられていた。この構造はフォーコーによってよく知られるようになった一望監視的なものではない。監視する視線は向かい合うペアーとの組み合わせと三角形の二重構造を構成し、更に三角形と三角形が向かい合ってペアーを構成していたから、視線はそのパターンの組み合わせに従って様々な方向へ向くようになっていた。このオフィス空間は、懲罰的な仕掛けになっていた。ある日私は731部隊の元隊員のインタビューをテレビで見てそのネクロ政治的な仕組みを理解した。以下の記述は経験主義的な真実ではない。この寓喩的ナラティブがこのオフィス空間に特定の意味を与えている点、あるいはこの空間の経験に真実性を与えている点が重要である³⁸⁾。この三角構造を転写してつくられたパターンは巨視的には別のパターンを作り上げていたことを付け加える必要がある。お堀端に沿って点在していた数多くの官僚組織から成る小さな三角形の群れは、階層構造を作りながら集散的に十六条旭日旗に類似したフォーム（あるいは日本の官僚的フィールドの地理学）を作り上げていた。

さて、その老人が所属したセクションは、731部隊がハルビンから撤収する際、生体実験に使った囚人たちを殺す任務が与えられた。自動車でひき殺す方法では、一度に殺せる人数が限られていた。次に囚人たちを自分で殺させた。自分で自分を殺す時、囚人たちは苦しみのため中々自分を殺すことが出来なかった。そこで考案されたのが次の方法だったという。二人の囚人が向かい合って立たされる。二人の首に輪になったロープを掛ける。棒をその輪に通して二人で回させる。その元隊員によれば、二人で棒を回すと苦しいからどンドンまわして簡単に自分たちを殺してしまったという。日本兵に強制されてひとりで自分を殺せと命じられた囚人は、苦しみが躊躇させるためにすぐには死なない。二人一組にされた囚人は、苦しいからどンドン棒を回して簡単に死んだという。前者の場合、死に直面して躊躇する主体の自由が死を遅らせた。後者の場合は、主体の自律性は完全に抹殺されている。主体は抹殺され、死を強要する731部隊の隊員と、同じ輪の中に入れられた二人の囚人は、三角形を構成して、三者の間に否定的連帯とでも呼ぶことが出来るネクロな協力関係が生まれる。勿論これは連帯の力を生み出したオフィス空間内の身体配置の*modus operandi*についてのオネイリックな比喩である。内容が皆無でそれ自体は躰の道具に思われた決裁という形式のプロセスが、その形式にそって決裁文書を書く著者のメタナラティブであったように、増殖するペアーとトリオの組み合わせこそ、そこに参加する個人の自律性を殺し、自由な個人同士であったなら決して連帯を持たなかつたろう職員の間にもメカニカルでネクロな同胞愛を生み出していた³⁹⁾。

下級職員は次々と辞めて新しい職員が次々と補充された。やめる前の職員は暗い顔をしていた。私が辞職した後「キケン分子の会」を作って励ましあっていた下級職員たちもいたが、まもなく殆どが辞職した。私は何度も同じ夢を見た。私の爪は短く切られている。研究系上司が現れて爪を見せろという。私は爪を見せる。研究系上司はもっと切れと言う。私はできないと答える。研究系上司は爪切りを出して私の爪を切り始める。私の指は血だらけになる。職場では何度も決裁を書かされ赤を入れて最後に否定される「躰」と呼ばれていたパターンが繰り返した。2000年9月にエディンバラでケーララの近代化のプロセスについて研究発表をした時、古い友人に「君の発表の仕方には自信が無くなっている」と指摘されて、五年の間に内在する（意味形成と主体形成を同時に行う）フォームによって官僚的フィールドの中で現地化していたことを知った。私はサイドを辞める一年ほど前から皮膚疾患に悩まされていた。カナダの官僚的精神看護システムの中で五年間働き、客観主義が書くこと

を許さない内部のプロセスについての「禁じられたナラティブ」を書いたチャーチも、これを書くに至るプロセスで皮膚疾患に悩まされている (CHURCH 1995: 51-72)。私の場合は日本を出ただけでは皮膚疾患は治らなかった。日本を出て、日本の官僚システムの経験を記述する言葉を見つけ、一年目の終わりに実験的民族誌を書き、二年目にこれを人類学のコースに翻訳した頃、皮膚疾患は治っていた。

4. おわりにかえて

カフカは友人のマックス・ブロードに死後全ての原稿を破棄するように指示したが、それを守らなかったこの友人のおかげで私たちは『審判』を読むことができる。ブロードの手元に残された原稿の断章にはそれぞれタイトルが付けられていたが、順番は示されていない。ブロードはカフカが生前小説のタイトルを *Der Prozess* と呼んでいたことを覚えていた (BROD 1935: 252-256)。彼はKが処刑される場面を小説の終章にした。ドゥルーズらの読みは異なる。処刑の場面はカフカが生前に「夢」というタイトルで出版しているから、終わりの無い審判のプロセスの中でKが見る悪夢と理解したほうが良い (DELEUZE and GUATTARI 1986: 43-52)。エルンスト・パウエルによると *Der Prozess* には「審判」と「過程」の二つの意味がある (PAWEL 1984: 321)。だから『審判』というタイトルを付けて処刑による終章をつけたことはカフカの官僚プロセス理解を誤解している。ジンメル「絵画の額縁」同様、終わりの無いプロセスを終わらせてしまうフォームが官僚制度の *modus operandi* 理解を妨げている。『審判』はブロードが小説のフォームを記憶していたことを記憶している。

私は本稿の第一部では自律した人類学者が (ブルデューが「植民地的科学」と呼ぶ) 人類学の言葉で、第二部では自律性を持たなかった元現地人インサイダーがマイナーな風刺文学のオネイリックな言葉で、それぞれのフィールドで深く関わりを持つことになった開発の記憶を記述した。この二つのケースと二つのモードを通して明らかにしたかったことは次の一点である。開発のプロセスには記憶が無い。あるとすればフォームについての記憶である。開発体制内で「ケーララ」や「オールボーグ」が国際開発のフィールドに固有の素材から作られたモデルであること、またそのモデルをフィールドに固有な型や部品から作っているロジックが、因果論でありそれを根拠とした目的論であること、またその上位ロジックが新旧の近代化論であることを述べた。また官僚的フィールドにおいてはアブダクションが因果論に偽装していることも述べた。このフォームは第一に官僚的ナラティブの合理的フォーム、第二に、開発官僚システム内で働くネーティブたちがその身体で構成し続ける三角構造を持ったフォームから二重構造を構成している。プランニング的世界観と整合性を持つ第一のフォームの *modus operandi* と切り離すことが出来ない客観的構造としての第二のフォームの本質は、終わりのない繰り返しである。第一のフォームを使ったプランニングの言説は終わりを持つが、そのフィールドを構成している第二のフォームは終わりを持たない⁴⁰⁾。

日本の国際開発官僚システムに重ねられているナショナルな世界理解は、近代化論のプランニング的目的論を共有するが、フクヤマの終末論を共有していない点を付け加えておく。「顔の見える援助」は日本の開発官僚にとって宗教的強迫観念となっている。西欧的「顔の見える援助」の顔が第三世界の「受益者」であるのに対して日本のそれは「日本の顔」である。啓蒙主義的近代化論は啓蒙されるべき貧しい他者の顔を見ようとするのに対して、日本の国際開発は起源としての「日本の顔」が祝賀されることを願望する⁴¹⁾。前者の場合は終末、後者の場合は起源が重要である点が異なる。宗教的な次元でフクヤマの終末論的近代化論は新旧 (アメリカ独立革命と第二世界の消滅およびキリスト教会) の終末論を記憶している。日本の「顔の見える援助」はナショナルな起源を構成している (意味形成

と主体形成を同時に行う) 顔貌性を記憶している。この両者ともプロセスとしての開発の記憶ではない。開発のプロセスの只中では「ケーララの奇跡」や決裁文書を書く実践がそうであったようにフォームだけが、あるいは開発の図式の転写だけが記憶されている⁴²⁾。

註

東郷賢, 鈴木直喜, 伊東早苗, 長岡まり, 真崎克彦, Charles Jedrej, Thomas Hansen, Heonik Kwon, Iris Jean-Klein, Gabriele vom Bruck, 興石哲哉, 足立明, 黄順姫, Raymond Apthorpe, エディンバラ大学で私のAnthropology of Organisation and Democracyに出席して積極的に議論した学生たち, 筑波大学で私とブルデューと一緒に読んだ大学院生たちとの様々な対話は, 本稿(特に後半部分)を考える上で特に役立った。匿名査読者のコメントも本稿を読みやすくする上で役立った。最後に2000年9月に私と日本を出てエディンバラへ向かった妻と三人の子供たちにも感謝の意を表したい。

1) フィールドの性向(disposition)についてはBOURDIEU(1977)参照。

2) 芸術作品による第一次世界大戦の記憶を研究したジェイ・ウィンターによると, 大戦の記憶を記した画家, 詩人, 小説家たちの多くは黙示録の図式, あるいは旧約聖書の破壊の図式を使って(終末論的)歴史の過去へと眼差しを向けていた(WINTER 1995)。戦死者たちの記憶について研究したジョージ・モースによると, 第一次世界大戦中および戦後に戦死者の記憶がナショナルな記憶になる時, その記憶は復活のキリストの図式を使って個人と国家の再興のテーマに変容していた(MOSSE 1990)。開発の場合にも同様の傾向が見られる。支配的国際開発の実践と整合性を持つフランシス・フクヤマの「普遍的歴史」は終末論的な図式を使って終わりの始まりとしてのアメリカ独立革命とその後に続く歴史の終わりに眼差しを向けている(FUKUYAMA 1992)。

3) Gell(1992, 1998)参照。紙面の制約もあり本稿で「図式の転写」について十分に議論することは出来なかった。

4) 多面的な方法についてはFOUCAULT(1991)参照。

5) ここではナラティヴを始めと終わりを持った一続きの修辭的な語りとしておく。書き写されたナラティヴもナラティヴに含める。ナラティヴは物語をも含む修辭法である。ナラティヴの語りの主体は個人とは限らない。ナラティヴ分析はRIESSMAN(1993), 官僚プロセスへの応用はCHURCH(1995)参照。

6) 更に私を含めて元同僚たちは事務系上司から内部の問題が裁判沙汰になったらお前たちには勝ち目は無いとある会議で言い渡された経験を持つ。グROSSは1920年『ドイツ, 冬物語』(3.2 参照)を第一回国際ダダフェアに出品した際, 軍に対する名誉毀損罪の判決を受け罰金刑に処せられた。グROSSは1923年に出版した*Ecce Homo*(『この人を見よ』)において裸のキリストではなく退廢的なブルジョアたちの裸を描き(GROSZ 1923), 猥褻物陳列罪の審判を下され罰金刑に処せられた(WHITEFORD 1997: 10)。審理の中で裁判官がグROSSに対してこのなぜこれほどまでに性器の描写を強調しなければならないのかと詰問したところ「私が描いたように同じように私は見た…」と答えたという(WHITEFORD 1997: 14)。見えたように描くことがこの時代のワイマール共和国の官僚的フィールドでは非合法であったことをこのエピソードは証言している。これは私の経験にも当てはまる。職員たちは(グROSSやチャーチ同様)見えたように語ることを禁じられていた。

- 7) ジェフリーによると1981年のケーララの女性の識字率が65.7であるのに対して、全インドは24.8、ラージャスターンは11.4、ウッタルプラデシュは14.0となっている (JEFFREY 1992: 5)。フランクとチェンによれば、1991年ケーララの成人識字率は91、1997年アメリカの成人識字率は96である (FRANK and CHASIN 1999: 121)。ケーララ政府は私の滞在中 (1992-93年) 識字率100パーセント達成を宣言した。私が知っていたある識字教室に出席していた人々の中には結局読み書きの出来なかった大人たちも何人もいたが、識字教室に数回出席したこと (インデックス) が、読み書きが出来ることとして読み替えられた (アブダクション) と考えられる。その識字教室で教えていた不可触民パラヤの女性によると、出席者のリストを役人に提出したという。アナ・ツィングは南カリマンタンでインドネシア政府の役人が、ある山岳民族の集団の成人女性のリスト (インデックス) を手に入れて家族計画を受け入れた女性のリストと読み替えた (アブダクション) ケースを報告している (TSING 1993)。
- 8) 代表的なものはJEFFREY (1976) , MENON (1994)。
- 9) JEFFREY (1976, 1977, 1978a, 1978b, 1978c, 1984, 1992) , HERRING (1980, 1983, 1986) ; [HERRINGの弟子] HELLER (1996) ; FRANKE and CHASIN (1989, 1999) ; Sen (1992, 1996, 2000)。
- 10) SEN (1992, 1996a, 1996b, 1999)。
- 11) 場所の空間化についてはCASEY (1993, 1996, 1999, 2002) 参照。
- 12) ジジエクは根本的な敵対関係の解決のために、あるいはこれを隠蔽するために物語という閉塞 (occlusion) のテクニックが使われているという (ŽIŽEK 1997: 10-13)。
- 13) パラヤとプラヤは地主にではなく土地に付属した奴隷カーストであった。
- 14) 農地改革の前に土地を持っていたというこの記憶の起源の一つは、農地改革である。
- 15) 地主の一族の男たちが奴隷の男たちが働きに出ている間に不可触民の家にやってきて女をだました、あるいは強姦したという話は、パラヤとプラヤの男や女たちから祖先の話として、妻の話として、あるいは本人が若い頃の話として何度も聞いた。
- 16) NAGAM AIYA (1906), MATEER (1883), 村の登記所での聞き取りから推測。
- 17) Casey (1987)第三部参照。
- 18) 現象学者による代表的な場所研究はHEIDEGGER (1971) , CASEY (1993, 1999, 2002) 参照。現象学の場所研究を基礎とした人類学の場所研究はJACKSON (1995) , FELD and BASSO (1997) 参照。
- 19) クラヴァは山岳地帯と深い繋がりをもつ平地に住む不可触民カースト。パラヤやプラヤと異なり、比較的広い畑地を所有していた。パラヤやプラヤに比べてより自律しているが近年その土地を、ナール、シリア派キリスト教徒、イーラヴァに奪われている。
- 20) このロジックについてはTAUSSIG (1987), ŽIŽEK (1999) 参照。
- 21) 1992年12月13日、バスカラランピラの証言。
- 22) 1992年の時点で発病からおおよそ15年経過していた。
- 23) イーラヴァの金貸しの隣に住むカトリックプラヤ (この土地に唯一残ったプラヤの家族) の女性チェーランマは、コレラで死んだプラヤ女性の亡霊が髪を結わずに埋葬されたあたりをさまよう姿を見たという。1993年2月20日、チェーランマの証言。
- 24) 2000年9月に日本を離れ、クリスマス休暇に実験的民族誌を書き、2001年1月28日と4月28日にそれぞれ立民族学博物館とエディンバラ大学で口頭発表した後、2001年から2002年にかけてこれを社会人類学のコース (Anthropology of Organisation and Democracy) に翻訳して社会科学の中に位置づけ

ようと試みた。

25) 2002年8月にエディンバラから再び日本に戻り大学の研究室でこの記述を読み直すと、自分が置かれていた状況が何度も大きく変わっていることを理解した。チャーチはこれに類似した経験を「批判的自伝」の手法を使って学問の世界では描かれることが殆どない官僚的フィールドにおける主観と客観の間の葛藤のプロセスを記述して、これに「禁じられたナラティブ」と名づけている (CHURCH 1995)。特定の性向を持った諸フィールドー特に学問的フィールド、政治的フィールド、官僚的フィールドについて考える上でブルデューの議論 (BOURDIEU 1991, 1994, 2000) が役に立った。

26) オネイリック・モードはフィールドの性向を真似るので、フィールドの主要な図式あるいは型が模倣を通して記述するオネイリック・モードの属性ともなる。

27) 「オールボーグ憲章」(opus operatum) は <http://www.iclei.org/europe/echarter.html> で全文を見ることが出来るが、その *modus operandi* は当然のことながら隠されている。ベント・フリヴバークによる批判 (FLIVBJERG 1999) が出版された後でも、「オールボーグ」は公共交通政策の「良い実践例」として国際開発体制内で記憶されている (<http://www.eltis.org/en/conceptb.html>)。

28) 「ムード」の記述は重要である。バレンタイン・ダニエルはスリランカにおける民族紛争を理解するためにパースの記号論にヒントを得た、ムード-モーメント-マインドの三項からなるモデルを使っている。実際の事件 (モーメント) 前夜のムードは事件をすでに孕んでいる。事件の記憶 (マインド) は新たなムードを作り出す (DANIEL 1996)。

29) ルフォールは民主主義と専制の思いがけない近さを捕らえようとしている (LEFORT 1996, 1988)。

30) このエティモス論は歴史の終わりについて何も説明できないだけでなく、優越願望の一人勝ちによる黙示録的終わりをも孕んでいる。自由民主主義的帝国の一人勝ちの先には自己破壊的な可能性が残されている。この点についてはヘーゲル主義ヘラーの議論を (HELLER 1999) 参照。

31) Sによる2000年8月22日付けのノート。

32) ジェルが使った例えではボルポトの兵士がばら撒く彼の意図を分有した地雷は兵士の分散したパーソンを分有している。

33) 例を一つ挙げる。1991年に私はインドでの調査ビザを得るために正規の手続きを行ってビザを待ったが、半年が過ぎてもビザは下りなかった。メグナット・デサイ卿に話したところその日のうちにインド内相にファックスを送ってくれた。折り返しインド内務省からファックスが届き翌日調査ビザを取ることができた。

34) いじめの方法については宮元 (1993) が詳しい。この本は伊東早苗が読むことを薦めてくれたが、その記述には思い当たる節が多く当時は読み進むことが出来なかった。

35) この問題意識はBOURDIEU (1977) , BUTLER (1997) , HEIDEGGER (1971) に負うところが大きい。

36) このフレームワークの中で自律性を確保しようとしていた職員たちは「ここの予算を使って自分のやりたいことをやる」、「決裁を通して自分のやりたいことができるようにする」という意味のことを繰り返し言っていた。中でも親切な人たちは私にも同じことをするように勧めてくれた。私は彼らの真正な善良さを認めた上で、しかし彼らが勧めに従って「外部」を無くしたら自律性を保持することができないと考えていた。実際、私は研究系上司から外部の研究助成は使うな、研究費はこのものを使えと言われていたが、辞職する一年前からその研究費は使えないようにされていた。

37) 「3000万以上だ。セニョール・ラルセン。しかもね、これには過去数年間に上昇した我が社の株価は含ま

れていない。それに道路も何キロも保有している。これは土地として売却できる。保有している鉄道の最初の部分も売却できる。〈中略〉会社が更生したから裁判所が近々破産宣告を解除する兆候も見うけられる。債権者から押し付けられた官僚的な制約、ファイナンシャルな制約が取り除かれたら、われわれはすぐに新しい活力をもって、この会社を生き返らせる仕事に取りかかれる。私は必要な資金を要請できる。どこから取ってくるか選ぶだけだ。君にはここのところを手伝ってもらいたい。〈中略〉私は君のためにヘレミアス・ペトルス・リミテッドの代表取締役のポストを準備した。この仕事は非常に重い責任と多大な困難を伴う。手当てについては、会社が君に対して、忠誠、知性、信頼をどれだけ求めているかが理解できた段階で、君のほうから私に言ってくるのを待っている。」(ONETTI 1992: 20-21)

38) ナラティブは主観的な意味を作り出す。RIESSMANN (1993: 19-23) 参照。

39) 紙面の制約上、ある長さを必要とするオネイリック・モードによる開発官僚マシーンの記述はここで打ち切らざるを得ないが、また別の機会に書き続けることにする。

40) 貧困撲滅という開発の初期の目的を思い出せばこの矛盾は明らかである。貧困撲滅というゴールは一貫して達成されていないが開発制度はこの失敗を忘れて新たな貧困撲滅プロジェクトを作り続けている (Raymond Apthorpeの証言)。鈴木直喜はレッスンを学ばない開発のテーマで研究している (SUZUKI 2000)。

41) 「顔の見える援助」の公式な見解は「ODA白書」(1999, 2000) 参照。被援助国の受益者たちが日本の援助によるプロジェクトを日本の援助に抛るものと理解していないことを開発官僚が問題だとして様々な集まりでこれに言及していることは私自身知っていたが、伊東早苗によると、ある会合で開発官僚が開発のアカウントビリティーには受益者に対するものと納税者に対するものがあると言った後「日本の納税者に対するアカウントビリティーというのは顔の見える援助だ。日本の開発援助で橋が掛けられたらJAPAN ODAと書かれたプラカードを建てて、現地の人に日本の援助を認識してもらうことが必要だ」という意味のことを言ったという。

42) MOSSE (2001) は開発のプロセスを網羅的に記録するプロセス・ドキュメンテーションが開発体制によって拒絶された例を挙げている。プロセス・ドキュメンテーションを拒絶するこの意味生産システムの本性は何か? DELEUZE and GUATTARI (1987) は意味形成と主体形成を同時に行っている白い壁・黒い影から成る顔貌性を取り除くことはいかにして可能か視点を提供している。

参考文献

BOURDIEU, Pierre

1977. *Outline of a Theory of Practice*. CUP.

BOURDIEU, Pierre

1991. *The Political Ontology of Martin Heidegger*. Polity.

BOURDIEU, Pierre

1993. For a sociology of sociologists. In *Sociology in Question*. pp. 49-53. Sage.

BOURDIEU, Pierre

1994. Rethinking the State: Genesis and Structure of the Bureaucratic Field. *Sociological Theory*. 12(1): 1-18.

BOURDIEU, Pierre

2000. *Pascalian Meditations*. Polity.

BROD, Max

1935. Epilogue. In Franz KAFKA *The Trial*. pp.252-256. Victor Gollancz.

BUTLER, Judith

1997. *Excitable Speech: A Politics of the Performative*. Routledge.

CASEY, Edward S.

1987. *Remembering: A Phenomenological Study*. Indiana University Press.

CASEY, Edward S.

1993. *Getting Back into Place: Toward a Renewed Understanding of the Place-World*. Indiana University Press.

CASEY, Edward S.

1996. How to Get from Space to Place in a Fairly Short Stretch of Time: Phenomenological Prolegomena. In S.FELD and K.H.BASSO (eds.) *Senses of Place*. pp. 13-52. School of American Research Press.

CASEY, Edward S.

1999. *The Fate of Place: A Philosophical History*. Indiana University Press.

CASEY, Edward S.

2002. *Representing Place: Landscape Paintings and Maps*. Indiana University Press.

CHURCH, Kathryn

1995. *Forbidden Narratives: Critical autobiography as social science*. Routledge.

CZARNIAWSKA, Barbara

1997. *Narrating the Organization: Dramas of Institutional Identity*. University of Chicago Press.

DANIEL, E. Valentine

1984. *Fluid Signs: Being a person the Tamil way*. University of California Press.

DANIEL, E. Valentine

1996. *Charred Lullabies*. Princeton University Press

DELEUZE, Gilles and Félix GUATTARI

1986. *Kafka: Toward a Minor Literature*. University of Minnesota Press.

DELEUZE, Gilles and Félix GUATTARI

1987. Year Zero: Faciality. In *a thousand plateaus: capitalism and schizophrenia*. pp.167-191. University of Minnesota Press.

DRÈZE, Jean and Amartya SEN

1995. *India: Economic Development and Social Opportunity*, OUP.

FELD, Steven and Keith H. BASSO (eds.)

1997. *Senses of Place*. School of American Research Press.

FLYVBJERG, Bent

1998. *Rationality and Power: Democracy in Practice*. University of Chicago Press.

FOUCAULT, Michel

1982. The Subject and Power. In H.L.DREYFUS and P.RABINOW *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*. pp. 208-226. Harvester Press.

FOUCAULT, Michel

1991. Questions of Method. In G.BURCHELL, C.GORDON and P.MILLER (eds.) *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*. pp. 73-86. University of Chicago Press.

FRANKE, Richard W. and Barbara H. CHASIN

1989 *Kerala: Radical Reform as Development in an Indian State*. Institute for Food and Development Policy.

FRANKE, Richard W. and Barbara H. CHASIN

1999. Is the Kerala Model Sustainable? Lessons From the Past: Prospect for the Future. In M.A.OOMMEN (ed.) *Kerala's Development Experience I*. pp. 118-148. Institute of Social Sciences.

FUKUYAMA, Francis

1992. *The End of History and the Last Man*. Penguin.

GELL, Alfred

1992. The Technology of Enchantment and the Enchantment of Technology. In J.COOTE and A.SHELTON (eds.) *Anthropology, Art and Aesthetics*. pp. 40-67. OUP.

GELL, Alfred

1998. *Art and Agency: An anthropological theory*. OUP.

GOUGH, Kathleen

1965. Village Politics in Kerala. *The Economic Weekly*, February. 20: 363-372 & February 27: 413-420.

GOUGH, Kathleen

1967. Kerala Politics and the 1965 Election. *International Journal of Comparative Sociologie*. 8: 55-88.

GOUGH, Kathleen

1968. Communist Rural Councillors in Kerala. *Journal of Asian and African Studies*. 3(3-4): 181-202.

GOUGH, Kathleen

1970. Pōlakkara: Social and Religious Change in Central Kōrala. In K.ISHWARAN (ed.) *Change and Continuity in India's Villages*. pp.129-164. Columbia University Press.

GOUGH, Kathleen

1979. *Ten times more beautiful: Rebuilding of Vietnam*. Monthly Review.

GROSZ, George

1923. *Ecce Homo*. Der Malik Verlag.

HEGEL, Georg Wilhelm Friedrich

1952. *Philosophy of Right*. OUP.

HEIDEGGER, Martin

1971. Building, Dwelling, Thinking. In *Poetry, Language, Thought*. pp. 141-160. Harper & Row.

HELLER, Agnes

1999. *A theory of modernity*. Blackwell.

HELLER, Patrick

1996. Social Capital as a Product of Class Mobilization and State Intervention: Industrial Workers in Kerala, India. *World Development*. 24(6): 1055-67.

HERRING, Ronald J.

1980. Abolition of Landlordism in Kerala: A Redistribution of Privilege. *Economic and Political Weekly, Review of Agriculture*, June. pp.A59-A69.

HERRING, Ronald J.

1983. *Land to the Tiller: The Political Economy of Land Reform in South Asia*. Yale University Press.

HERRING, Ronald J.

1986. Managing the "Great Transformation": The truly awkward class in rural development. Paper prepared for the International Workshop on Rural Transformation in Asia. New Delhi, October.

HIRSCH, Eric and David N. GELLNER

2001. Introduction: Ethnographies of Organizations and Organizations of Ethnography. In D.N.GELLNER and E.HIRSCH (eds.) *Inside Organizations: Anthropologist at work*. pp. 1-15. Berg.

JACKSON, Michael

1995. *At home in the world*. Duke University Press.

JAY, Martin

1999. Against consolation: Walter Benjamin and the refusal to mourn. In J.WINTER and E.SIVAN (eds.) *War and Remembrance in the Twentieth Century*. pp. 221-239. CUP.

JEFFREY, Robin

1976. *The Decline of Nayar Dominance: Society and Politics in Travancore, 1847 - 1908*. Holmes & Meier Publishers.

JEFFREY, Robin

1977. A Sanctified Label: 'Congress' in Travancore Politics. In D.A.LOW (ed.) *Congress and the Raj*. pp. 435-472. Heinemann.

JEFFREY, Robin

- 1978a. Status, Class and the Growth of Radical Politics, 1860-1940: The Temple Entry Movement. In R.JEFFREY (ed.) *People, Princes and Paramount Power: Society and Politics in the Indian Princely States*. pp. 136-169. OUP.

JEFFREY, Robin

- 1978b. Matriliney, Marxism, and the Birth of the Communist Party in Kerala, 1930-1940. *Journal of Asian Studies*. 38(1): 77-98.

JEFFREY, Robin

- 1978c. Peasant Movement and the Communist Party in Kerala 1937-1957. In D.B.MILLER (ed.) *Peasant and Politics: Grass Roots Reactions to Change in Asia*. pp. 130-148. Edward Arnold.

JEFFREY, Robin

1984. 'Destroy Capitalism!': Growing Solidarity of Alleppey's Coir Worker, 1930-1940. *Economic*

and *Political Weekly*, July 21. pp.1159-1165.

JEFFREY, Robin

1992. *Politics, Women and Well Being: How Kerala Became 'A Model'*. Macmillan.

KAFKA, Franz

1935. *The Trial*. Victor Gollancz

LEFORT, Claude

1986. *The Political Forms of Modern Society: Bureaucracy, Democracy, Totalitarianism*. MIT Press.

LEFORT, Claude

1988. *Democracy and Political Theory*. University of Minnesota Press.

MATEER, Samuel

1883. *Native Life of Travancore*. W.H.Allen&Co.

MENON, Dilip M.

1994. *Caste, Nationalism and Communism in South India: Malabar 1900-1948*. CUP.

MOSSE, David

2001. Social Research in Rural Development Projects. In D.N.GELNER and E.HIRSCH (eds.) *Inside Organizations: Anthropologist at work*. pp.157-181. Berg.

MOSSE, George L.

1990. *Fallen Soldiers: Reshaping the Memory of the World Wars*. OUP.

MURRAY, Jack

1991. *The Landscapes of Alienation: Ideological subversion in Kafka, Céline, and Onetti*. Stanford University Press.

NAGAM AIYA, V.

1906. *The Travancore State Manual*. 3 vols. Government Press.

ONETTI, Juan Carlos

1992. *The Shipyard*. Serpent's Tail.

PAWEL, Ernst

1984. *The Nightmare of Reason: A life of Franz Kafka*. Farrar Straus Giroux.

RAMACHANDRAN, V.K.

1996. On Kerala's Development Achievement. In J.DRÈZE and A.SEN (eds.) *Indian Development: Selected Regional Perspectives*. pp. 205-356. OUP.

RIESSMANN, Catherine Kohler

1993. *Narrative Analysis*. Sage.

RILES, Annelise

2000. *The network inside out*. University of Michigan Press.

SEN, Amartya

1992. *Inequality Reexamined*. OUP.

SEN, Amartya

1996a. Radical Needs and Moderate Reforms. In J.DRÈZE and A.SEN (eds.) *Indian Development:*

Selected Regional Perspectives. pp. 1-28. OUP.

SEN, Amartya

1996b. Objectivity, Health and Policy. In M. DAS GUPTA *et al* (eds.) *Health, Poverty and Development in India*. pp. 25-31, OUP.

SEN, Amartya

1999. *Development as Freedom*. OUP.

SIMMEL, Georg

1994. The Picture Frame: An Aesthetic Study. *Theory, Culture & Society*. 11: 11-17.

SUZUKI, Naoki

2000. What Prevents Development Organizations from Learning?: The Difficulties in Learning to be Learners. In J.CARLSSON and L.WOHLGEMUTH (eds.) *Learning in Development Co-operation*. pp. 88-102. Expert Group on Development Issues.

TAUSSIG, Michael

1987. *Shamanism, Colonialism and the Wild Man: A study in terror and healing*. University of Chicago Press.

TSING, Anna L.

1993. *In the realm of the diamond queen: Marginality in an out-of-the-way place*. Princeton University Press.

UCHIYAMADA, Yasushi

1998. 'The grove is our temple.' Contested representations of *Kaavu* in South India. In L.RIVAL (ed.) *The Social Life of Trees: Anthropological Perspectives on Tree Symbolism*. pp.177-196. Berg.

UCHIYAMADA, Yasushi

1999a. Soil, Self, Resistance: Late-modernity and locative spirit possession in Kerala. In J.ASSAYAG and G.TARABOUT (eds.) *La Possession en Asie du Sud: Parole, Corps, Territoire (Purusartha □ 21)*. pp. 289-311. École des Hautes Études en Sciences Sociales.

UCHIYAMADA, Yasushi

1999b. Two Beautiful Untouchable Women: Processes of Becoming in South India. In S. DAY, E.PAPATAXIARCHIS and M.STEWART (eds.) *Lilies of the Field: Marginal People Who Live for the Moment*. pp. 96-116. Westview.

UCHIYAMADA, Yasushi

2000. Passions in the Landscape: Ancestor spirit and land reforms in Kerala, India. *South Asia Research*. 20(1): 63-84.

UCHIYAMADA, Yasushi

2001. Journeys to Watersheds: Ecology, Nation and Shifting Balance of *Malyaalam*. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*. 13: 107-141.

UCHIYAMADA, Yasushi

2002. Projecting textual identities on the forest of Kuravas in Kerala. In C.MARINE and J.CHRISTOPHE (eds.) *Tribus et basses castes. Résistance et autonomie dans la société indienne*

(*Purusartha* 23). pp. 373-390. École des Hautes Études en Sciences Sociales.

WHITEFORD, Frank

1997. *The Berlin of George Grosz*. Yale University Press.

WINTER, Jay

1995. *Sites of Memory, Sites of Mourning: The Great War in European cultural history*. CUP.

WOOD, Paul

1993. Realism and Realities. In B.FER, D.BATCHELOR and P.WOOD (eds.) *Realism, Rationalism, Surrealism: Art between the Wars*. pp. 250-333. Yale University Press.

ŽIŽEK, Slavoj

1997. *The Plague of Fantasies*. Verso.

ŽIŽEK, Slavoj

1999. The Hegelian Ticklish Subject. In *The Ticklish Subject*. pp. 70-123. Verso.

外務省経済協力局編

1999. 『我が国の政府開発援助：ODA白書』国際協力推進協会。

外務省経済協力局編

2000. 『我が国の政府開発援助：ODA白書』国際協力推進協会。

宮元政於

1993. 『お役所の掟：ぶっ飛び「霞ヶ関」事情』講談社。